

第
619
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第619集

内

田

(2)

遺

跡

II

二
〇
二
一
・
三

青
森
県
教
育
委
員
会

内田(2)遺跡 II

—国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2021年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第619集

内田(2)遺跡Ⅱ

—国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2021年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、むつ南バイパス道路改築事業に伴い、平成26年度から事業地内の発掘調査を実施してきました。これまでに本遺跡を含め、斗南丘（5）遺跡、酪農（1）遺跡、内田（1）遺跡で調査が行われ、縄文時代中期から後期にかけての集落跡や狩猟場の他、旧石器時代の遺物が発見され、田名部平野の先史時代の様相が明らかとなってきています。

本報告書は、令和元年度に実施した調査の成果をまとめたものです。調査では、縄文時代の落とし穴が数多く見つかりました。平成29年度に本遺跡で行われた調査成果と合わせると、下北地域では最大級の狩猟場であったことがわかりました。

これらの成果が今後の埋蔵文化財の保護等に広く活用され、地域の歴史を解明する一助となることを期待します。

最後に、平素から埋蔵文化財の保護と活用に御理解をいただいている青森県県土整備部道路課にお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成に当たり御指導・御協力を賜りました関係者の皆様にお礼申し上げます。

令和3年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤 禎人

例言

- 1 本書は、青森県県土整備部道路課による国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和元年度に発掘調査を実施したむつ市内田（2）遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は6,000㎡である。
- 2 本書は内田（2）遺跡の発掘調査報告書としては平成31年3月に刊行した『内田（2）遺跡』に続き2冊目である。
- 3 内田（2）遺跡の所在地は、青森県むつ市大字田名部字内田地内、青森県遺跡番号は208185である。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成の期間は以下の通りである。

発掘調査期間	平成31年4月24日から令和元年6月28日
整理期間	令和2年4月1日から令和3年3月31日
- 6 本書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主幹中村哲也・平山明寿・佐藤智生が担当し、文末に執筆者名を記した。
- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

遺物の写真撮影	有限会社無限
---------	--------
- 8 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品・実測図・写真等は現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 9 本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図『むつ』・『蒲ノ沢』・『城ヶ沢』・『近川』を複写して使用した。
- 10 測量原点の座標値は世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
- 11 挿図中の方位はすべて世界測地系の座標北を示している。
- 12 遺構については、検出順に、予め定めたその種類を示す略号と、通し番号を付した。遺構に使用した略号は以下のとおりである。

S V	溝状土坑
-----	------
- 13 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 14 遺構実測図の縮尺は、原則として1/60に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。
- 15 遺構実測図で使用した線種は以下のとおりである。

実線：調査区境界、遺構線、等高線など	破線：推定線、隠れて見えない遺構線
一点鎖線：掘りすぎ等遺構本来の形状とは異なる発掘限界線、土層断面図・エレベーション図における層界・遺構線とは異なる発掘限界線	

目次

第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第2章 周辺の歴史的環境と地形・地質	
第1節 歴史的環境	6
第2節 遺跡周辺の地形・地質と基本層序	8
第3章 検出された遺構と遺物	
第1節 概要	10
第2節 A区で検出された遺構	10
第3節 B区で検出された遺構	17
第4節 遺構外出土遺物	22
第4章 総括	
第1節 内田（2）遺跡の調査成果	24
第2節 縄文時代後期の集落について	24
第3節 縄文時代の落とし穴について	26
参考文献	29
写真図版	31
抄録	
奥付	

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、青森県教育庁文化財保護課（以下、文化財保護課）と青森県県土整備部道路課及び下北地域県民局地域整備部道路施設・高規格道路建設課（以下、事業者）が平成20年度から継続的に協議および現地踏査を行っており、状況が整い次第、文化財保護課が試掘・確認調査を実施してきた。

内田(2)遺跡は、平成27年度に行われた文化財保護課による試掘調査の結果、縄文時代の遺構・遺物が確認され、同年度に周知の埋蔵文化財包蔵地として新規に登録された。平成28年度に文化財保護課と事業者が協議し、用地買収や立木伐採等が完了した箇所から、段階的に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行うこととした。発掘調査は平成29年度および令和元年度に実施し、平成29年度の発掘調査成果については青森県埋蔵文化財調査報告書第602集『内田(2)遺跡』に収録した。本書は令和元年度に実施した発掘調査の成果報告であり、書名は『内田(2)遺跡Ⅱ』となる。

文化財保護法第94条第1項による土木工事等のための発掘に関する通知は、下北地域県民局長から平成29年3月16日付下県局整備第1363号で提出され、これを受けて工事着手前の発掘調査の実施が、青森県教育委員会教育長から平成29年3月29日付け青教文第1725号で通知されている。

第2節 調査の方法

(1) 発掘作業の方法

平成29年度に青森県埋蔵文化財調査センターが実施した発掘調査により、遺構（縄文時代後期の土坑、焼土、集石遺構、縄文時代の溝状土坑）・遺物（縄文時代後期の土器・石器、旧石器時代の石器）が検出されたため、遺物包含層の精査、縄文時代の遺構調査に重点をおいて、遺跡の時期・構造等を把握できるような調査方法を採用した。

〔測量基準点・水準点の設置・グリッド設定〕

平成29年度の調査時に設定したグリッドと同一のグリッド体系を用いた。詳細は次のとおりである。調査対象区域内に国土座標第X系に軸を合わせた4m×4mのグリッドを図上で調査区全体を覆うように設定した。各グリッドは、南から北にIから始まるローマ数字とA～Yのアルファベットを、西から東に1から始まる算用数字を付して、その南西隅の組み合わせで、IA-1グリッド、IID-99グリッドなどと呼称した。グリッド基点（IA-1）の国土座標は世界測地系でX=139,100.000m、Y=33,600.000mとした（第3図）。現地でのグリッド表示は必要に応じてトータルステーションやメジャー等を利用しピンポール、グリッドピン等に表示した。

また、便宜上、調査対象範囲の中央部を北東―南西に横切る道路の北側をA区、南側をB区と呼称した。

測量原点・レベル原点は、国道279号むつ南バイパス事業で付近に設置された3級基準点H28-3No.17（H=10.059）から直接水準法により移動して、調査区内に適宜ベンチマークを設けた。

〔基本土層〕

遺跡の基本土層については、平成 29 年度の調査に合わせて、表土から順にローマ数字を付けて呼称した。

〔表土等の調査〕

表土は基本的に重機により除去した。結果としてほぼ全面で表土直下に基本層序第Ⅳまたは第Ⅴ層の上部が露出するまで削平を受けていることが判明した。出土した遺物は、適宜地区単位で層位毎に取り上げた。

〔遺構の調査〕

検出遺構には、それぞれ調査区頭文字のアルファベットと種別ごとの 1 から始まる番号を、原則として確認順に付して精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には 4 分割又は 2 分割で設定した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に簡易遣り方測量と（株）Cubic 製「遺構実測支援システム」を用いたトータルステーションによる測量を併用して作成した。遺構の堆積土層断面図は、簡易遣り方測量等で縮尺 1/20・1/10 の実測図を作成した。

〔遺物包含層の調査〕

上層から層位毎に人力で掘削した。遺物が散発的に出土した区域では、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。平成 29 年度の調査では旧石器時代の石器が出土したため、縄文時代の遺構精査後、A 区南部から B 区にかけて 4 × 4 m のトレンチを適宜設定し、第Ⅴ層を 30~40cm 程度掘削し、遺物の有無を確認した。

〔写真撮影〕

写真撮影には、原則として 35 ミリモノクローム、35 ミリカラーリバーサルの各フィルム及び 1,800 万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。

（2）整理・報告書作成作業の方法

調査の結果、縄文時代の溝状土坑 16 基が検出され、縄文時代の土器・石器等の遺物が段ボール 1 箱出土した。整理作業は縄文時代の遺跡構造の理解のため、遺構の形成時期や配置に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

〔図面類の整理〕

土層断面図、エレベーション図との整合性をとるため図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

〔写真類の整理〕

35 ミリモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35 ミリカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは 35 ミリカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕

遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。

〔報告書掲載遺物の選別〕

遺物全体の分類を適切に行った上で、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

〔遺物の観察・図化〕

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

〔遺物の写真撮影〕

業者に委託し、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕

遺構・遺物の実測図やその他の挿図は、(株) Cubic 製トレースくんおよび Adobesystems 社製 Illustrator (CC)・Photoshop (CC)・を用いてデジタルデータ化し、すべて Adobesystems 社製 Indesign (CC) で編集した。

〔遺構の検討・分類・整理〕

遺構毎に種類・構造的特徴に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

〔遺物の検討・分類・整理〕

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

〔調査成果の検討〕

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、周辺遺跡の性格や時期などを考慮し、縄文時代の遺跡構造・活動領域について検討・整理した。

第3節 調査の経過

(1) 発掘作業の経過

令和元年度の内田(2)遺跡発掘調査は、6,000 m²を対象として、4月24日から6月28日までの発掘作業期間で実施することになった。平成29年度に青森県埋蔵文化財調査センターが行った発掘調査の結果、縄文時代後期の土坑・焼土等・集石遺構と遺物包含層、縄文時代の溝状土坑が確認されているので、表土から順次掘り下げて遺物包含層の調査、縄文時代の遺構検出・精査の順に発掘作業を進めることにした。発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	鈴木 学	(令和2年3月退職 現スポーツ健康課総括主幹専門員)
	次長(総務 GM 兼務)	川村 和夫	
	調査第二 GM	笹森 一朗	(令和2年3月退職 現文化財保護主幹)
	文化財保護主幹	中村 哲也	(発掘調査担当者)
	文化財保護主幹	平山 明寿	(発掘調査担当者)
	文化財保護主幹	佐藤 智生	(発掘調査担当者)
専門的事項に関する指導・助言			
調査員	福田 友之	元青森県立郷土館副館長(考古学)	
	上條 信彦	国立大学法人弘前大学人文社会科学部准教授 (現教授 考古学)	
	根本 直樹	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師(地質学)	

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

4月10日 事業者、文化財保護課と調査前の打合せを行い、畑への進入路は必ず確保し砂利敷とすること、B区の地盤は軟弱なので、残土を置かないことなどについて確認した。

4月中旬～下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備、表土除去等、事前の準備作業を行った。

4月24日 発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備終了後、重機による表土除去の終了した区域から遺構検出作業を行った。事業者、文化財保護課との打合せの後、A区の調査は東西に二分割して実施することとし、西側から着手した。

5月中旬～下旬 重機を稼働し、B区の旧宅地造成部分の盛土を除去・搬出し、終了後、遺構検出作業を行った。また、A区の遺構・遺物の分布状況から、A区西側に設定した砂利敷きの畑への進入路下には遺構・遺物が存在する可能性はないと判断した。

6月上旬～下旬、B区を中心に、A区南部～B区にかけて、遺構精査が終わった区域から4×4mのトレンチを適宜設定し、旧石器時代の遺物の有無を確認した。調査の結果、旧石器時代の遺物は出土しなかった。

6月中旬～下旬 可能な場所から順次B区の埋め戻しを実施した。また、A区の残土移動を行い、未精査部分の調査を並行して実施した。

6月28日 発掘調査の全工程を終了し機材を撤収した。

7月上旬、重機による埋め戻し作業を実施した。

(2) 整理・報告書作成作業の経過

報告書刊行事業は令和2年4月1日から令和3年3月31日までの期間で行った。内田(2)遺跡は縄文時代の遺跡で、溝状土坑が多数検出されたため、これに応じた整理作業の工程を計画した。

整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

調 査 主 体 青森県埋蔵文化財調査センター

所 長	佐藤 禎人
次長(総務 GM 兼務)	川村 和夫
調査第一 GM	鈴木 和子
文化財保護主幹	中村 哲也(整理作業担当者)
文化財保護主幹	平山 明寿(整理作業担当者)
文化財保護主幹	佐藤 智生(整理作業担当者)

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は以下のとおりである。

4月上旬 写真類の整理作業と図面類の整理作業を行った。

4月中旬 遺物は洗浄・注記作業が終了した遺構・地区から計量を行い、遺構ごと、グリッドごとの出土量を集計した。その後、遺構の検討・整理作業を開始し、遺構一覧表等を作成した。また、土器・石器・土製品・石製品類の報告書掲載遺物を選別した。

4月下旬以降、選別した報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進めた。併せて遺物台帳等を作成した。また、遺構実測図や遺構配置図・調査区域図等の調整・トレースを行った。

10月下旬 図化作業が終了した遺物から、順次トレースを行った。トレースが終了した遺構・遺物については、印刷用の版下を作成した。この間に、報告書掲載遺物の写真撮影を委託により行い、写真図版を作成した。また、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。

12月上旬 原稿・版下等が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。

3月10日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。

3月下旬 記録類・出土品を整理して収納した。 (中村)

第2章 周辺の歴史的環境と地形・地質

第1節 歴史的環境

内田(2)遺跡はむつ市の中心街から南南東に、直線で約5kmの位置にある。陸奥湾の現海岸線からの距離はおよそ700～800mである。ここでは、縄文時代の遺跡を中心に記載する。遺跡情報については青森県遺跡地名表2018年9月25日版(以下“遺跡地名表”)を基に、一部2020年12月18日版、各遺跡の発掘調査報告を用いて補足した。

この地域では田名部低地を挟んで南東側と北西側の段丘上に遺跡の分布が知られている。旧石器時代の遺跡は、現在のところ、ナイフ形石器が報告された内田(2)遺跡(青森県教育委員会 2019)が初見例である。

縄文時代早期には遺跡が散見されるようになり、南東側には今泉(1)遺跡、内並木(3)遺跡、最花遺跡が、北西側には問屋場遺跡をはじめ4遺跡がある。

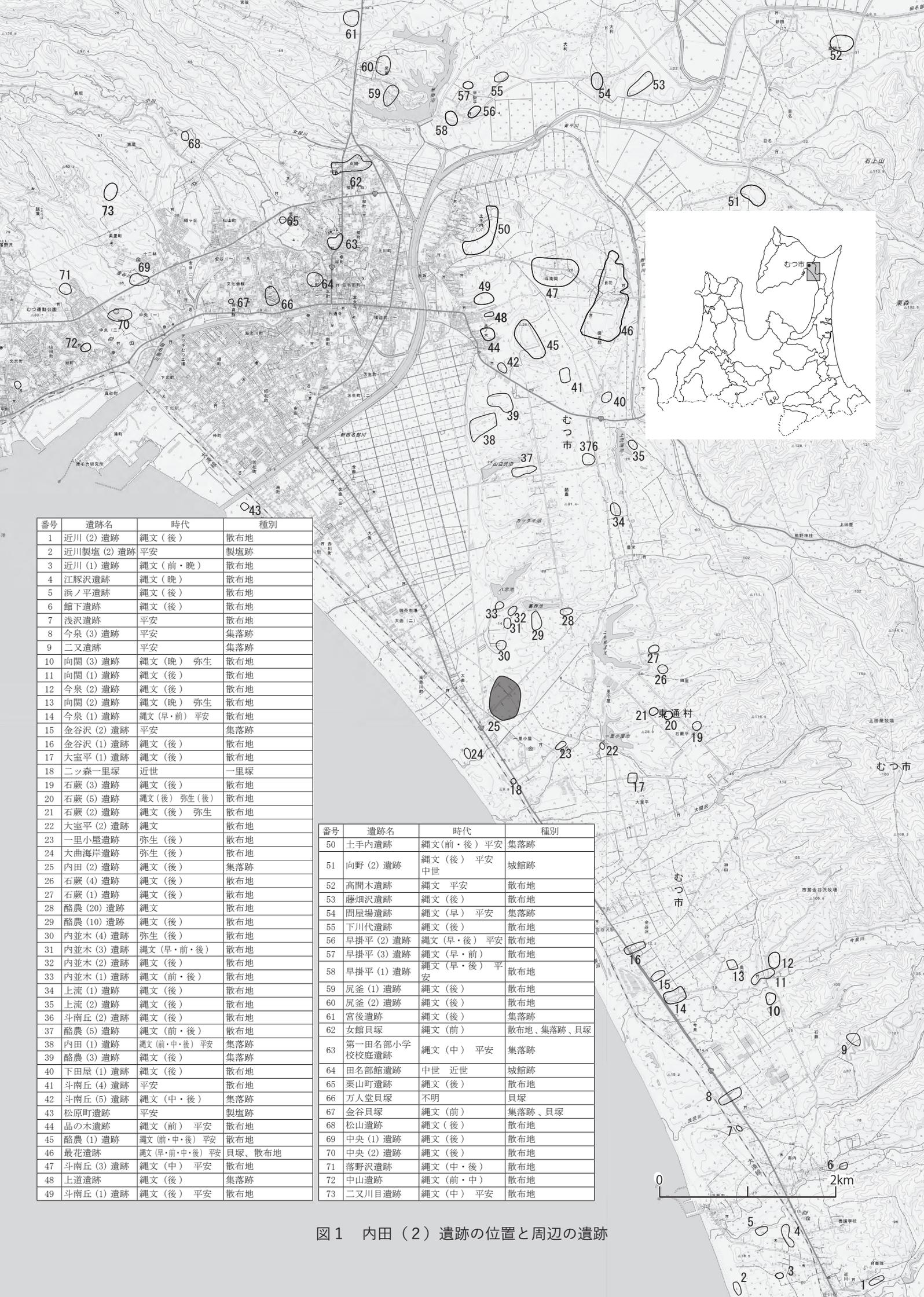
縄文時代前期には南東側に最花遺跡(金子・牛沢・橘・奈良 1978など)のほかに9遺跡、北西側に早掛平(3)遺跡、女館貝塚、金谷貝塚、中山遺跡、および掲載範囲のわずかに西方に大平遺跡、田名部平野南端から南に5～6kmのむつ市奥内に遺跡が所在する。このうち、北西側の女館貝塚は慶応大学による発掘調査が行われ、出土土器は円筒下層c式設定の基準資料となった。多量のヤマトシジミを主体に11種の貝が出土したことが報告されており(江坂 1955)、南東側の最花遺跡とともに貝塚を伴う拠点的な集落とみられる。金谷貝塚ではアサリを主体に、コタマガイ、ハマグリなど内湾砂底の貝3種が出土している(橘・奈良 1977)。

縄文時代中期には南東側に最花遺跡のほか4遺跡が、北西側に第1田名部小学校校庭遺跡のほかに4遺跡が知られている。最花遺跡の中期～後期初頭の集落は径200mに及ぶと考えられており(安藤・安達 2009)、前期から引き続き拠点的な遺跡と考えられる。最花遺跡からはアサリ、ヤマトシジミを主体としてカラスガイ、イシガイといった淡水種、ホタテなど22種の貝が出土している(金子・牛沢・橘・奈良 1978、金子・橘・奈良 1983)。

縄文時代後期には遺跡数が増え、南東側には金谷沢(1)遺跡を始め全32遺跡、むつ市奥内に2遺跡、北西側に12遺跡が分布する。南東側にある最花南遺跡(橘・奈良 1984、橘・奈良・星 1985)はかつて最花遺跡とは別の遺跡として登録されていたが、現在では最花遺跡として統合されている。むつ市教育委員会による発掘調査では後期初頭の土器が出土しており(橘・奈良 1980、橘編 1981、橘・奈良 1984)、後期にも継続したことが知られている。南東側の内田(1)遺跡は平成28年度に当センターにより発掘調査が行われ、掘立柱建物跡が環状に巡る後期初頭～前葉の集落が検出されている(青森県教育委員会 2018)。拠点的な集落と考えられる。同じく南東側に位置する上道遺跡(橘・奈良 1981)は、土取りにより消滅したと考えられるが、個人により土器・土製品等が採集されており、その内容・量(中村 2018・2019・2020)から推して内田(1)遺跡とほぼ同時期の拠点的な集落と考えられる。

縄文時代晩期の遺跡は田名部平野から姿を消し、むつ市奥内に2遺跡、北西側は掲載範囲から西側にわずかに外れた位置に1遺跡がある。

この地域の縄文時代の遺跡動態を総括すれば以下のようなだろう。縄文時代早期には断続的な利用



番号	遺跡名	時代	種別
1	近川(2)遺跡	縄文(後)	散布地
2	近川製塩(2)遺跡	平安	製塩跡
3	近川(1)遺跡	縄文(前・晩)	散布地
4	江豚沢遺跡	縄文(晩)	散布地
5	浜ノ平遺跡	縄文(後)	散布地
6	館下遺跡	縄文(後)	散布地
7	浅沢遺跡	平安	散布地
8	今泉(3)遺跡	平安	集落跡
9	二又遺跡	平安	集落跡
10	向関(3)遺跡	縄文(晩) 弥生	散布地
11	向関(1)遺跡	縄文(後)	散布地
12	今泉(2)遺跡	縄文(後)	散布地
13	向関(2)遺跡	縄文(晩) 弥生	散布地
14	今泉(1)遺跡	縄文(早・前) 平安	散布地
15	金谷沢(2)遺跡	平安	集落跡
16	金谷沢(1)遺跡	縄文(後)	散布地
17	大室平(1)遺跡	縄文(後)	散布地
18	二ッ森一里塚	近世	一里塚
19	石蔵(3)遺跡	縄文(後)	散布地
20	石蔵(5)遺跡	縄文(後) 弥生	散布地
21	石蔵(2)遺跡	縄文(後) 弥生	散布地
22	大室平(2)遺跡	縄文	散布地
23	一里小屋遺跡	弥生(後)	散布地
24	大曲海岸遺跡	弥生(後)	散布地
25	内田(2)遺跡	縄文(後)	集落跡
26	石蔵(4)遺跡	縄文(後)	散布地
27	石蔵(1)遺跡	縄文(後)	散布地
28	酪農(20)遺跡	縄文	散布地
29	酪農(10)遺跡	縄文(後)	散布地
30	内並木(4)遺跡	弥生(後)	散布地
31	内並木(3)遺跡	縄文(早・前・後)	散布地
32	内並木(2)遺跡	縄文(後)	散布地
33	内並木(1)遺跡	縄文(前・後)	散布地
34	上流(1)遺跡	縄文(後)	散布地
35	上流(2)遺跡	縄文(後)	散布地
36	斗南丘(2)遺跡	縄文(後)	散布地
37	酪農(5)遺跡	縄文(前・後)	散布地
38	内田(1)遺跡	縄文(前・中・後) 平安	集落跡
39	酪農(3)遺跡	縄文(後)	集落跡
40	下田屋(1)遺跡	縄文(後)	散布地
41	斗南丘(4)遺跡	平安	散布地
42	斗南丘(5)遺跡	縄文(中・後)	集落跡
43	松原町遺跡	平安	製塩跡
44	品の木遺跡	縄文(前) 平安	散布地
45	酪農(1)遺跡	縄文(前・中・後) 平安	散布地
46	最花遺跡	縄文(早・前・中・後) 平安	貝塚、散布地
47	斗南丘(3)遺跡	縄文(中) 平安	散布地
48	上道遺跡	縄文(後)	集落跡
49	斗南丘(1)遺跡	縄文(後) 平安	散布地

番号	遺跡名	時代	種別
50	土手内遺跡	縄文(前・後) 平安	集落跡
51	向野(2)遺跡	縄文(後) 平安 中世	城館跡
52	高間木遺跡	縄文 平安	散布地
53	藤畑沢遺跡	縄文(後)	散布地
54	間屋場遺跡	縄文(早) 平安	集落跡
55	下川代遺跡	縄文(後)	散布地
56	早掛平(2)遺跡	縄文(早・後) 平安	散布地
57	早掛平(3)遺跡	縄文(早・前)	散布地
58	早掛平(1)遺跡	平安	散布地
59	尻釜(1)遺跡	縄文(後)	散布地
60	尻釜(2)遺跡	縄文(後)	散布地
61	宮後遺跡	縄文(後)	集落跡
62	女館貝塚	縄文(前)	散布地、集落跡、貝塚
63	第一田名部小学 校校庭遺跡	縄文(中) 平安	集落跡
64	田名部館遺跡	中世 近世	城館跡
65	栗山町遺跡	縄文(後)	散布地
66	万人堂貝塚	不明	貝塚
67	金谷貝塚	縄文(前)	集落跡、貝塚
68	松山遺跡	縄文(後)	散布地
69	中央(1)遺跡	縄文(後)	散布地
70	中央(2)遺跡	縄文(後)	散布地
71	落野沢遺跡	縄文(中・後)	散布地
72	中山遺跡	縄文(前・中)	散布地
73	二又川目遺跡	縄文(中) 平安	散布地

図1 内田(2)遺跡の位置と周辺の遺跡

が行われた。縄文時代前期頃から田名部平野の両岸に拠点的な集落が形成される。中期には南東側の最花遺跡が拠点的な集落と目される。前期から中期にかけて南東側の最花遺跡が位置する台地上では小規模な集落や散布地が分布し、人間の様々な活動が展開した。後期初頭から前葉にかけて、最花遺跡、内田(1)遺跡、上道遺跡などの拠点的と目される集落が複数展開するようになる。土器型式の上ではこれらの集落は同時と考えられる。また、田名部川の両岸で遺跡数が増え、内田(2)遺跡のように従来集落の見られなかった低位段丘面にも遺跡が進出する。縄文時代晩期には遺跡が減少する。

第2節 遺跡周辺の地形・地質と基本層序

内田(2)遺跡の地形・地質と基本層序については『内田(2)遺跡』(青森県教育委員会 2019)で詳しく述べられている。ここでは同書や関連する文献を参照しながら概略を述べる。

遺跡は下北半島のほぼ中央部に位置する田名部平野内にある。田名部平野は最終間氷期から海退期にかけて形成された海成段丘からなる。

田名部平野の西側には恐山火山地、東側には砂子又丘陵が位置する。恐山は安山岩と火砕物からなる第四紀火山、砂子又丘陵は第三系中新統の珪質泥岩・シルト岩を主とする蒲ノ沢層、凝灰質砂岩層を主とする砂子又層からなる。恐山の活動期は数十万年前から1万数千年前と考えられている。

田名部川以南には最終氷期から間氷期にかけて形成された海成段丘であるM-1面～M-3面が分布する。M-1面(標高15~40m)は津軽海峡に面する海岸から陸奥湾にかけて、M-2面(標高15~25m)は津軽海峡に面する海岸線に、広く分布し、M-3面(標高5~15m)は陸奥湾側に小規模に分布する。この地域ではM-1面に多くの縄文遺跡が立地することが知られているが、本遺跡は、西方に向かって緩やかに標高を減ずる緩傾斜地であるM-3面上に立地する。

田名部平野では海岸線に沿って幅1~2kmの間に浜堤列が3列形成されており、段丘面と浜堤列・浜堤列間は泥炭地となっている。最も古く内陸側にある第I浜堤列と段丘の間の泥炭層が4470±yr.B.P.(未校正)の年代を示し、遅くともおよそ4,500年前には第I浜堤列(松本 1984)が形成されたと考えられている。田名部川河口付近の河床の海成砂泥堆積物から採取された貝化石(橘・奈良・山口 1975)の¹⁴C年代は、田名部川河口から約6.8kmの地点で6,370±190yr.B.P.、約5.5kmの地点で5,920±130yr.B.P.、約4.5kmの地点で5,480±120B.P.(いずれも未校正)と現在の河口に近づくに従って新しい値を示すようになる。周辺の貝塚で出土した貝種の分析と併せて、縄文海進期、田名部平野に海水が侵入して形成された古大湊湾は時代が下るとともに縮小し、縄文中期には急激な海面低下が起こり潟湖化したと考えられている(松島・奈良 1988)。先に述べた縄文時代の遺跡の消長も田名部平野の環境変化と併せて理解する必要がある。

遺跡が所在する台地は二つの谷によって北部を南東から北西方向に、南部を北西から南東方向に刻まれ、調査区にもその一部がかかっている。平成29年度調査A区の北部、平成29年度調査および令和元年度調査のB区南部～南東部は谷に面した斜面となっている。

次に遺跡の層序について述べる。遺跡の層序は平成29年度の調査で把握していただいたため、層序区分は基本的にこれを用いる予定であったが、令和元年度の調査では結果的に調査対象区域のほとんどが表土直下に第IV層または第V層上部が露出するまで削平を受けていることが明らかとなった。

ここでは遺跡の構造を理解するため、『内田(2)遺跡』(青森県教育委員会 2019)の内容を引用しながら説明する。

調査区は台地平坦面と北部・南部を開析する谷部を含んでいる。台地平坦面の多くは削平を受けており、黒色土の保存状況は悪い。北部の谷に向かう緩傾斜面と道路南側の谷に向かう緩斜面では黒色土が比較的良好に保存されていた。第III層が主要な包含層で、第IV～第V層が遺構検出面である。第VI層以下は海成層であると考えられる。

第I層 7.5YR2/2 黒褐色土層

第II層 10YR2/1 黒色腐植質土層

A区ではローム粒や細砂粒の混入が目立つ。B区の低湿地では本層に相当する黒色土層は、未分解の植物遺体集積層で、II a、II b、II cの三層に細分される。II a層は植物遺体を多量に含む10YR1/2 黒色シルト層、II b層は10YR2/3 黒褐色シルトで充填された植物遺体の密集層、II c層は白頭山一苦小牧火山灰 (B-Tm) かと思われる黄灰色シルト質火山灰が途切れながらブロック状に認められる。

第III層 10YR2/1 黒色腐植質土層

A区の北端の傾斜地では堅く締まり、谷地形寄りでは黒泥質となる。B区の尾根上では砂質のシルト層で低湿地部では砂を少量含むシルトに漸位し、土色から少なくとも4層に細分される。B区では緩斜面及び緩斜面と低湿地部の境界付近で縄文時代後期の遺物が出土したが、低湿地部では遺物は出土しなかった。

第IV層 10YR4/4 褐色土

土壌化が進んだ火山灰層で、下部ほど色調が明るくブロック状の混入が目立つ。段丘面頂部を中心として多くの部分で、表土直下に本層が認められ、削平を受けたことがわかる。A区緩斜面下方では水の影響で7.5YR3/2 黒褐色土、B区低湿地部では10YR3/3 暗褐色細粒砂質粘土となる。

第V層 10YR4/4 褐色ローム

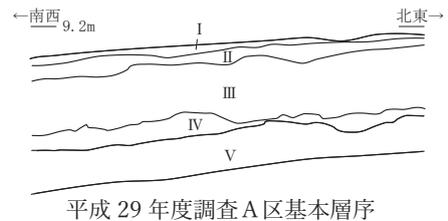
上部は緻密なローム、下部はややソフトなロームである。

第VI層 暗緑灰色砂

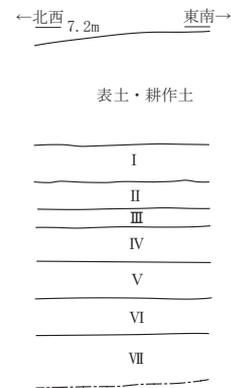
貝殻の細片を多量に含む細粒～中粒砂である。

第VII層 灰白色砂層

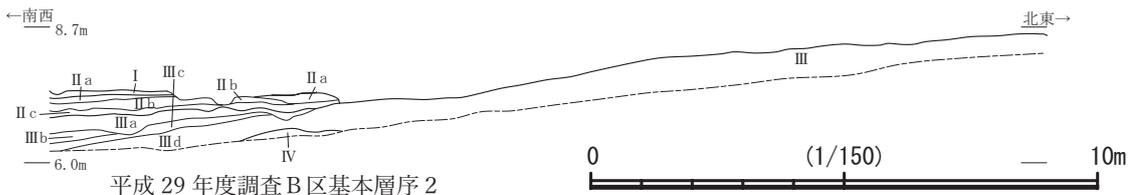
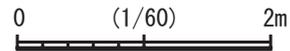
(中村)



平成29年度調査A区基本層序



平成29年度調査B区基本層序1



平成29年度調査B区基本層序2

図2 基本層序

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

令和元年度の調査では、南北に長い調査区中央部を北東－南西方向にはしる道路の北西側の長さ約100 m、南東側の長さ約60 mの範囲を調査した。前述のように平成29年度の調査で使用した地区名を引き継ぎ、北西側をA区、南東側をB区と呼称した。調査の結果、調査区はほぼ全面が、表土直下に第IV層・第V層上部が露出するまで削平を受けていたことが明らかになり、A区で縄文時代の溝状土坑8基、B区で縄文時代の溝状土坑8基、計16基が検出された。出土遺物はA区・B区併せて段ボール1箱分である。

第2節 A区で検出された遺構

(1) A区の概要

A区はほとんどが平坦な地形であるが、平成29年度に調査した北東部は調査区東側から北西に向かう谷地形に面した緩斜面、北端部はやや急な斜面となっている。(図3・4)

平成29年度の調査では、北端部から南に約100 mの範囲を精査した。北半平坦部は、ほとんどが削平を受けており、傾斜がやや急になる北端部の主にIV K-15～IV M-20グリッドにかけて、およびIV M～IV I-16グリッドでわずかに遺物包含層が残存していた(第23図)。土坑3基はこの付近で検出された。溝状土坑は平坦部から緩斜面にかけて広く分布する。トレンチャーによる攪乱を受けた区域が多く、特に調査区南半のⅢ Qライン～Ⅲ Uラインは激しく重複し、トレンチャーによる耕作土を取り除くため、わずかに残存した地山とともに重機で掘削した部分もある。北部ではトレンチャーによる攪乱および耕作土からも縄文土器の細片が多く出土した。Ⅲ Rライン以南ではトレンチャーによる攪乱が少なかったにもかかわらず、遺物は出土しなかったことから、本来的にこの付近には分布しなかったものと考えられる。

令和元年度は残されたA区南半の調査を行った。谷地形が調査区から東へと離れていくため、平成29年度調査区北半にみられた谷地形に続く緩斜面は、令和元年度調査区にはみられず、平坦面となっている。溝状土坑8基が検出され、その分布は調査区の東半部に偏っている。縄文時代の遺物包含層である第Ⅲ層はほぼ全面で削平されていた。遺物は耕作土中から縄文時代後期の土器片25点(175.0 g)、石鏃1点(4.4 g)が出土したのみである。平成29年度調査時の遺物出土状況と比較すれば、本来的に遺物の分布がまばらであったと考えられる。

(2) A区で検出された遺構

A区第22号溝状土坑[ASV-22](図5、写真図版2)

[位置]Ⅲ D-45グリッドに位置する。[検出]第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状]平面形は全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3 m 17cm×短軸62cm、底面で長軸3 m 29cm×短軸16cm、深さ98cmである。長軸方向の断面は中位が最も膨らみ、3 m 57cmである。[堆積土]黒色・暗褐色のシルトと第IV・V層起源と思われる褐色粘土質シルトが主体で、レンズ状の堆積を示す。自然堆積により埋没した可能性が考えられる。[出土遺物]なし。[時期]本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

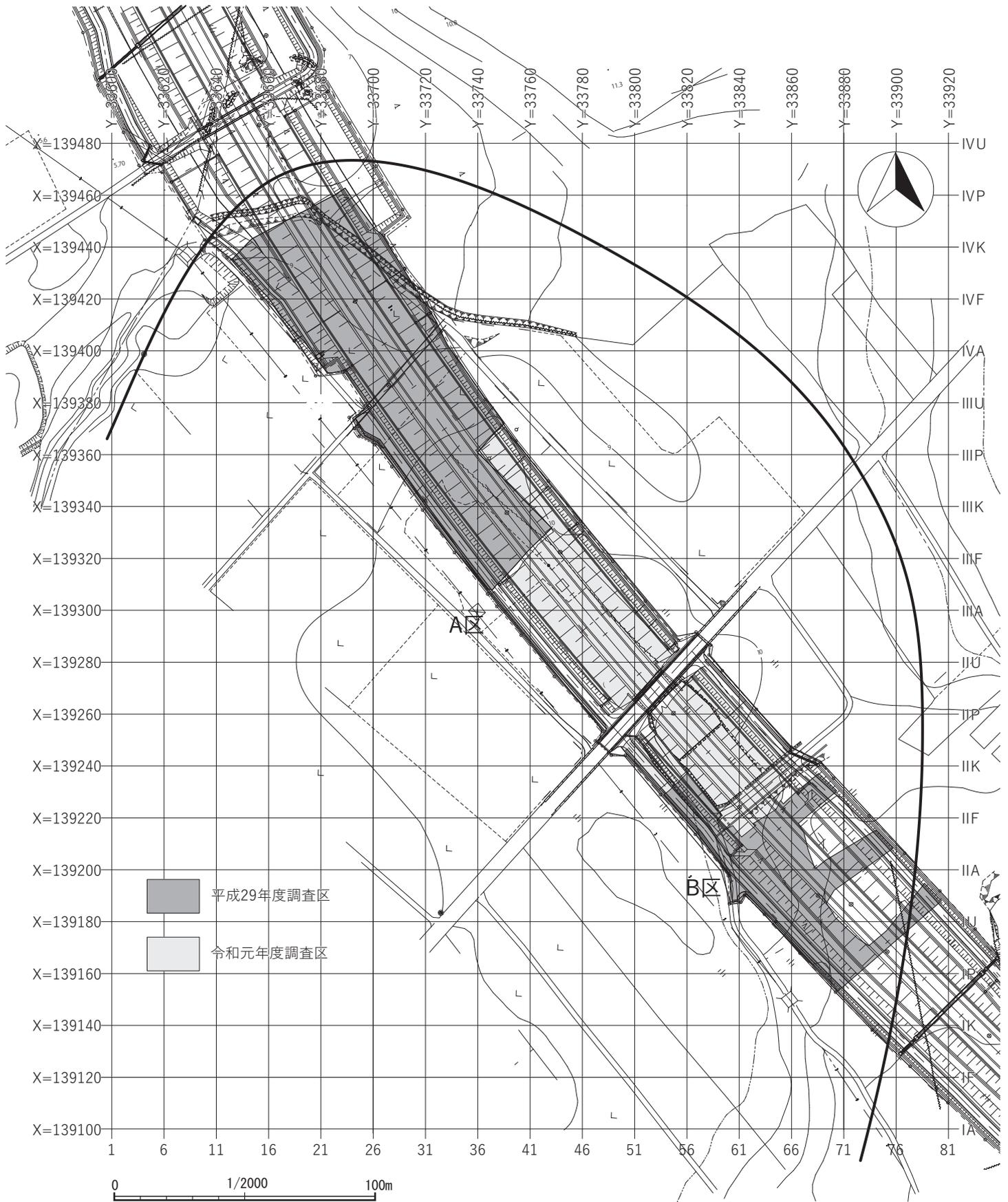


図3 調査区・グリッド配置図

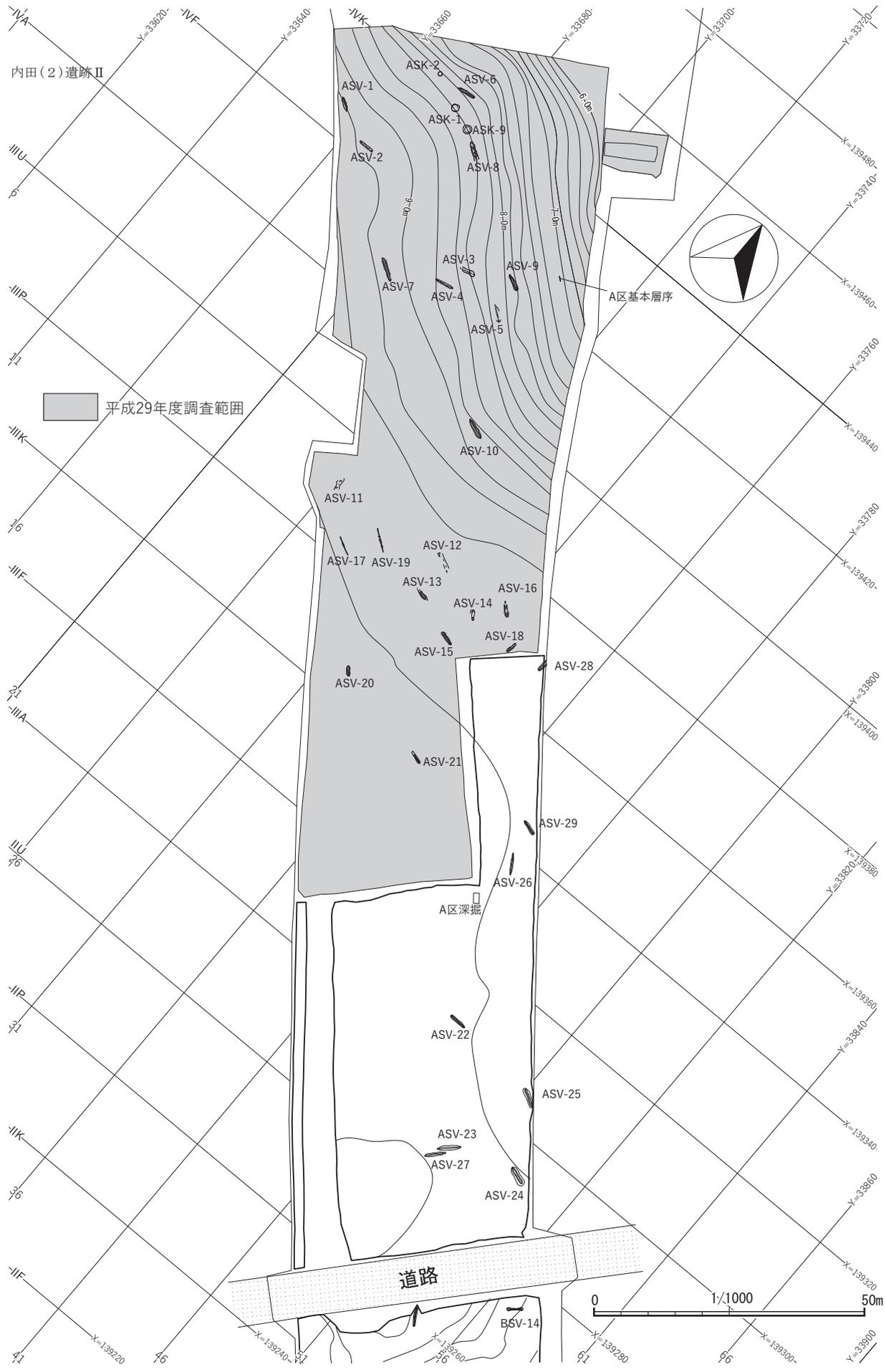


图4 A区遺構配置图

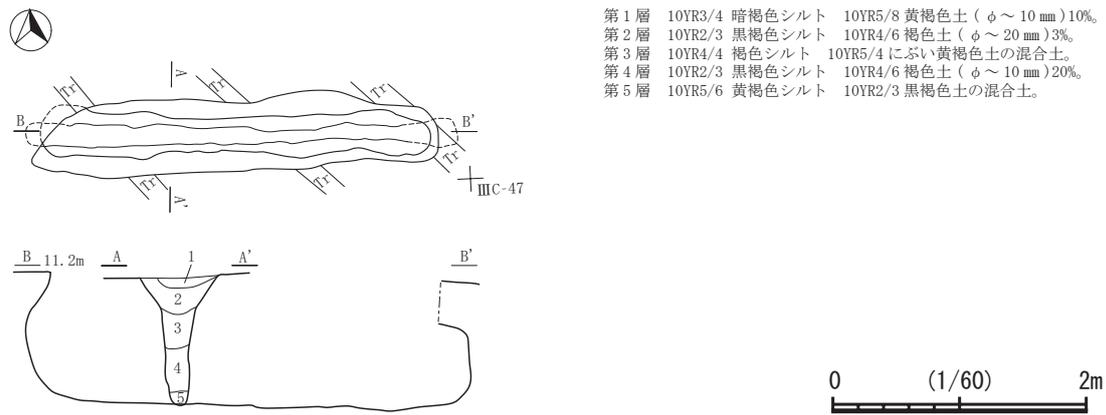


図5 A区第22号溝状土坑

A区第23号溝状土坑 [ASV-23] (図6、写真図版2・3)

[位置] II W-49・50 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。
 [規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3m 98cm×短軸86cm、底面で長軸4m 36cm×短軸25cm、深さ1m 4cmである。長軸両端の壁は中位から底面にかけて広がる。最大長は4m 38cmである。[堆積土] 10層に分層した。黒色・暗褐色のシルトと第IV・V層起源と思われる褐色粘土質シルトが主体で、レンズ状の堆積を示す。自然堆積により埋没した可能性が考えられる。
 [出土遺物] なし。[時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

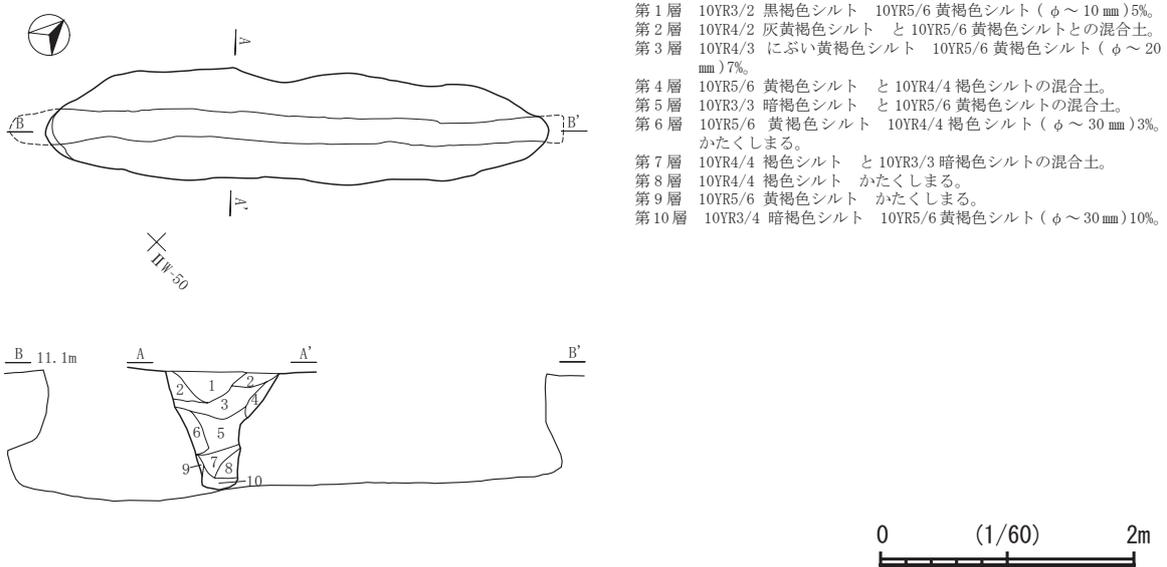


図6 A区第23号溝状土坑

A区第24号溝状土坑 [ASV-24] (図7、写真図版3)

[位置] II X-52・53 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。
 [規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3m 79cm×短軸1m 30cm、底面で長軸3m 56cm×短軸31cm、深さ1m 11cmである。[堆積土] 8層に分層した。黒色・暗褐色のシ

ルトと第Ⅳ・Ⅴ層起源と思われる褐色粘土質シルトが主体で、レンズ状の堆積を示す。自然堆積により埋没した可能性が考えられる。[出土遺物]なし。[時期]本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

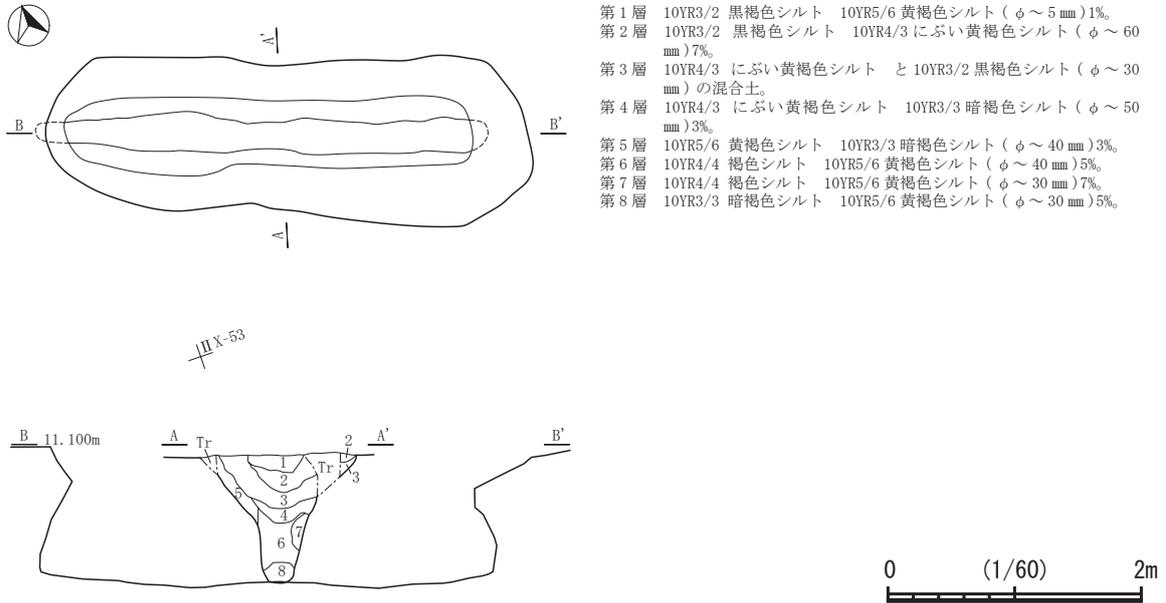


図7 A区第24号溝状土坑

A区第25号溝状土坑 [ASV-25] (図8、写真図版4)

[位置] III B-50・51 グリッドに位置する。[検出] 第Ⅳ層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3m 93cm×短軸87cm、底面で長軸3m 77cm×短軸22cm、深さ1m 32cmである。[堆積土] 8層に分層した。黒色・暗褐色のシルトと第Ⅳ・Ⅴ層起源と思われる褐色粘土質シルトが主体で、レンズ状の堆積を示す。自然堆積により埋没した可能性が考えられる。[出土遺物]なし。[時期]本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

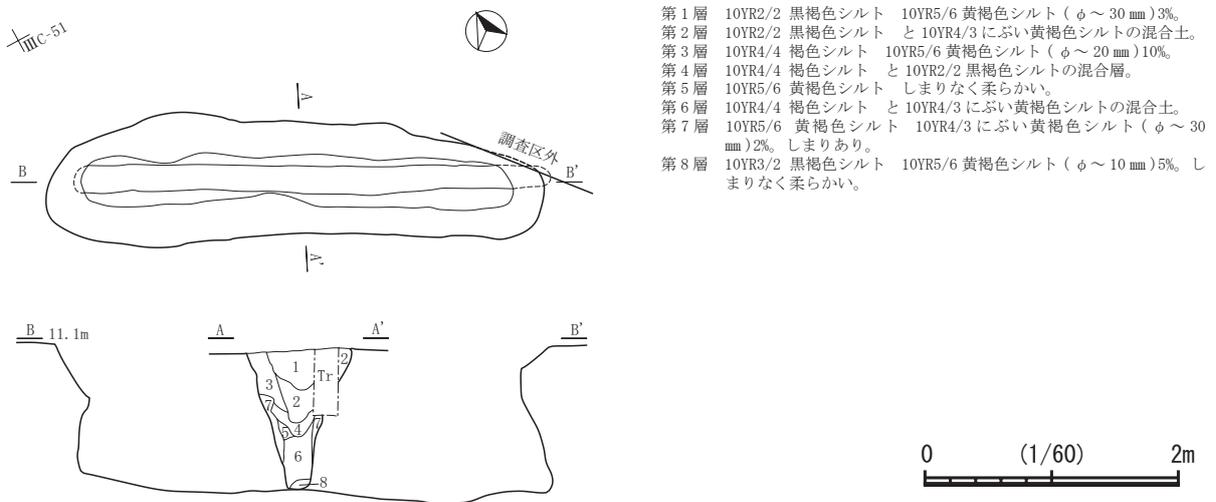


図8 A区第25号溝状土坑

A区第26号溝状土坑 [ASV-26] (図9、写真図版4)

[位置] III I・J-43・44 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3 m 75cm ×短軸46cm、底面で長軸4 m 16cm ×短軸13cm、深さ86cmで、底面に最大長がある。[堆積土] 6層に分層した。黒色・暗褐色のシルトと第IV・V層起源と思われる褐色粘土質シルトが主体で、レンズ状の堆積を示す。自然堆積により埋没した可能性が考えられる。[出土遺物] なし。[時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

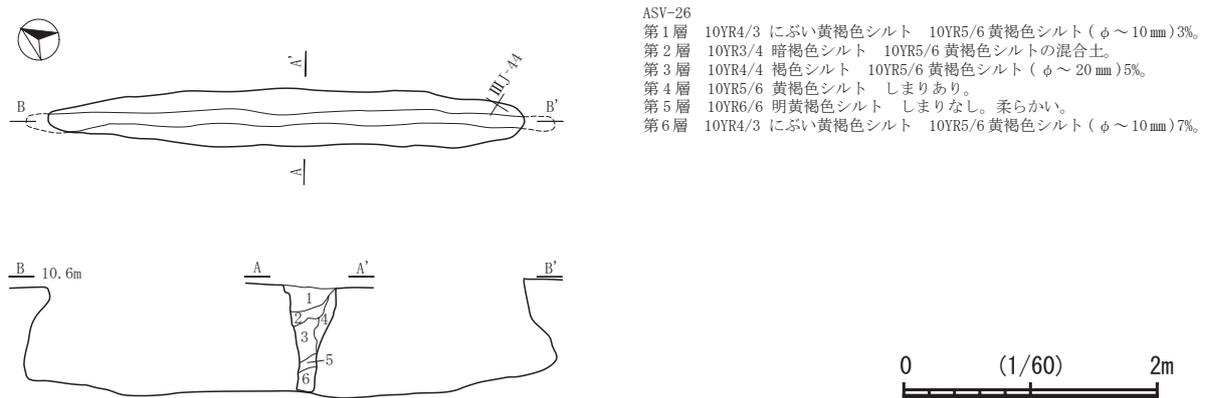


図9 A区第26号溝状土坑

A区第27号溝状土坑 [ASV-27] (図10、写真図版1・5)

[位置] II V-49・50 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3 m 41cm ×短軸69cm、底面で長軸3 m 93cm ×短軸21cm、深さ97cmである。底面付近に最大長があり、底面は北東側が高くなる。[堆積土] 6層に分層した。黒色・暗褐色のシルトと第IV・V層起源と思われる褐色粘土質シルトが主体で、レンズ状の堆積を示す。自然堆積により埋没した可能性が考えられる。[出土遺物] なし。[時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

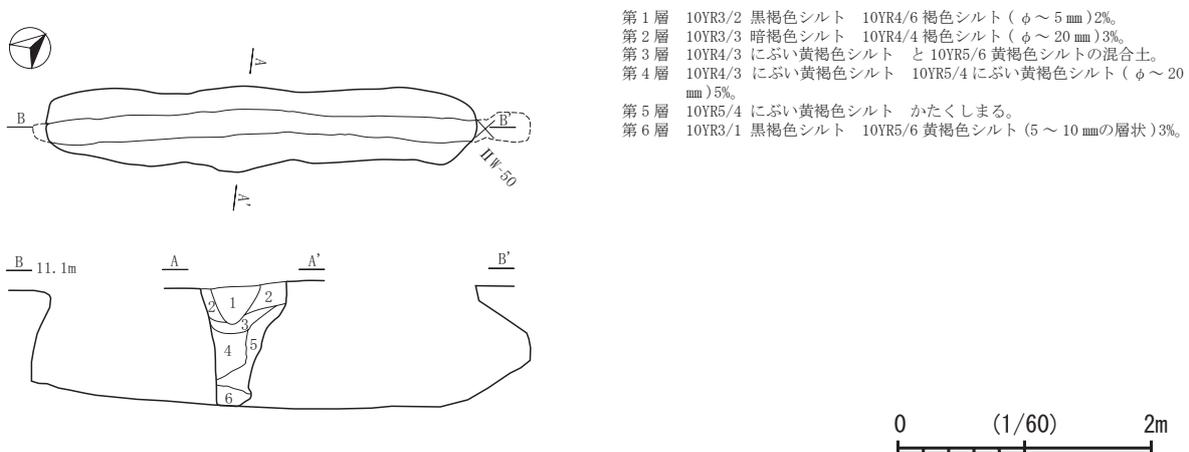


図10 A区第27号溝状土坑

A区第28号溝状土坑 [ASV-28] (図11、写真図版5)

[位置] III R-38 グリッドに位置し、全長のおよそ2分の1以上が調査区外に延びると思われる。
 [検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。
 [規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸2m 38cm×短軸72cm、底面で長軸2m 35cm×短軸33cm、深さ1m 20cmである。
 [堆積土] 6層に分層した。黒色・暗褐色のシルトと第IV・V層起源と思われる褐色粘土質シルトが主体で、レンズ状の堆積を示す。自然堆積により埋没した可能性が考えられる。
 [出土遺物] なし。
 [時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

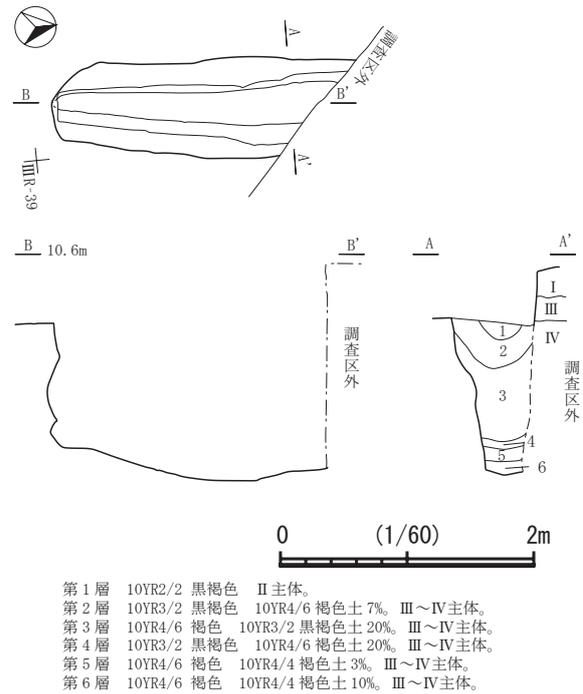


図11 A区第28号溝状土坑

A区第29号溝状土坑 [ASV-29] (図12、写真図版6)

[位置] III L-42・43 グリッドに位置する。
 [検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。
 [規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸2m 86cm×短軸73cm、底面で長軸2m 95cm×短軸17cm、深さ1m 12cmである。
 [堆積土] 6層に分層した。黒色・暗褐色のシルトと第IV・V層起源と思われる褐色粘土質シルトが主体で、レンズ状の堆積を示す。自然堆積により埋没した可能性が考えられる。
 [出土遺物] なし。
 [時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

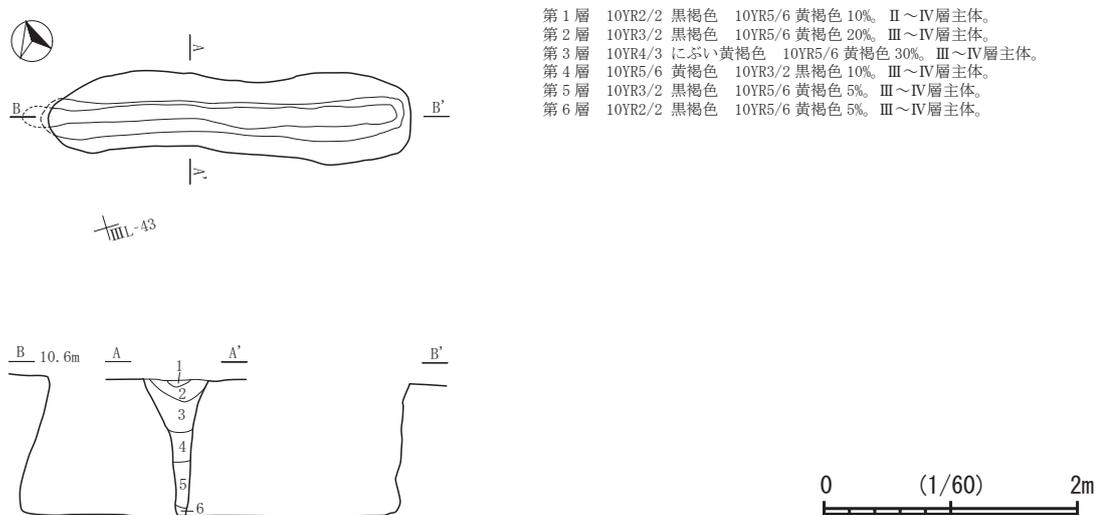


図12 A区第29号溝状土坑

第3節 B区で検出された遺構

(1) B区の概要

B区は調査区西部では段丘平坦面となるが、段丘面を刻む谷地形が調査区東側から南側にあり、谷地形に続く緩斜面が占める割合が大きい。(図3・14)

平成29年度は調査対象区域南端から北へおよそ100mの範囲を調査した。段丘平坦面と東側へ傾斜する緩斜面、更にその南側・東側にある低湿地を含む。主に段丘平坦面から斜面にかけて、縄文時代後期の焼土、土器・石器や縄文時代の溝状土坑が8基、縄文時代後期の可能性がある集石遺構1基などが検出された。谷部では湧水が激しく、遺構・遺物とも検出されなかった。

令和元年度は北側に残された区域を調査した。東側3分の2はかつて宅地として造成が行われ、調査前は厚い盛土が施されていた。調査の結果、盛土は約2mの厚さに及び、旧地形は東側3分の2ほどが調査区中央を走る農免道路付近から南東側に傾斜する斜面、西側3分の1ほどが段丘平坦面であったことが判明した。また、ほぼ全面にわたって、基本層序Ⅲ層以上が削平されていることも明らかになった。遺構は斜面部から溝状土坑が8基検出された。そのうち5基は斜面部の中位～下位に位置し、調査中に湧水が生じる状況で、特にBSV-11～13は周辺を含めて湛水する状況であった。遺物は部分的にごく薄く残った第Ⅲ層中から縄文土器片46点(339.3g)、石鏃1点(0.6g)が出土した。

(2) B区で検出された遺構

B区第9号溝状土坑 [BSV- 9] (図13、写真図版6)

[位置] II H・I-61 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3m90cm×短軸62cm、底面で長軸3m74cm×短軸17cm、深さ1m20cmである。[堆積土] 4層に分層した。第4層は細分しなかったが、黄褐色シルトの三角堆積が壁際に複数見られ、自然堆積により埋没した可能性が考えられる。[出土遺物] 第1層から縄文時代の土器の細片が3点(2.4g)出土した。細片のため時期は不詳である。[時期] 詳細な時期は不明である。

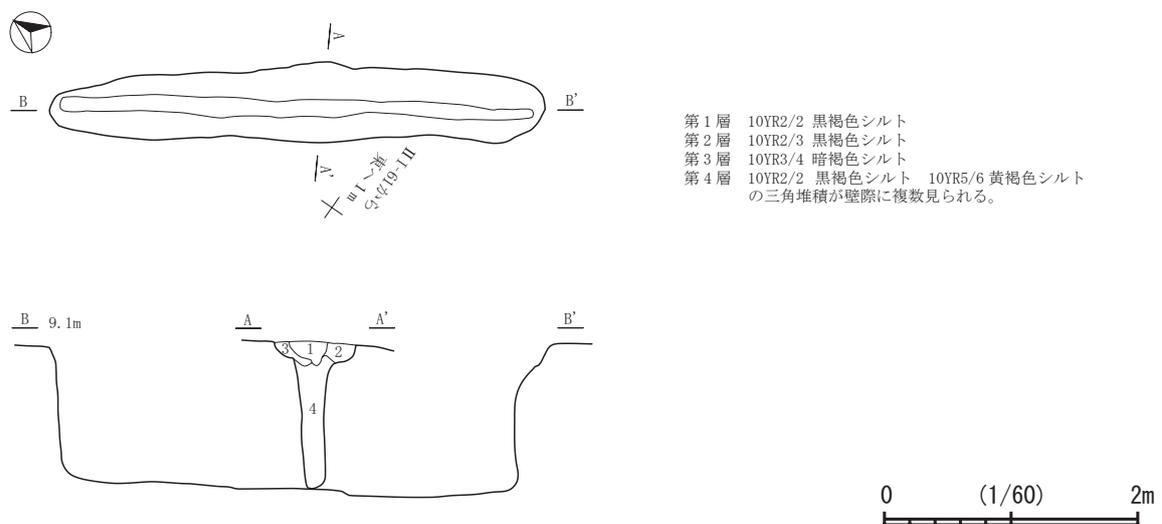


図13 B区第9号溝状土坑

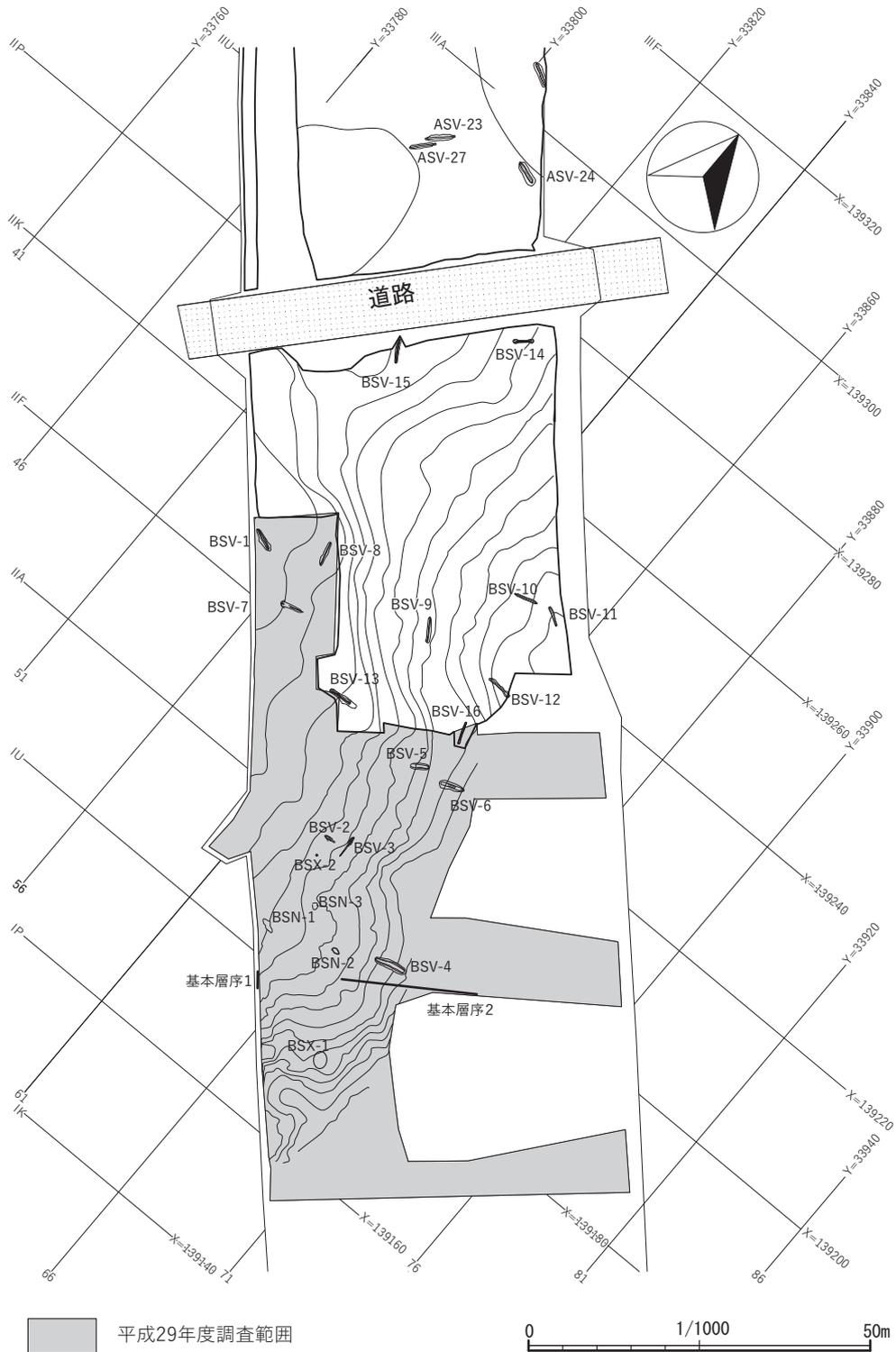


図 14 B 区遺構配置図

B区第10号溝状土坑 [BSV-10] (図15、写真図版7)

[位置] II L-62・63 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3 m 28cm ×短軸40cm、底面で長軸3 m 59cm ×短軸19cm、深さ83cmである。長軸両端の壁は傾斜して開口部から外側に向けて傾斜する。長軸最大長は底面から深さの3分の1ほど上位で、3 m 64cmである。[堆積土] 5層に分層した。黒褐色・暗褐色・褐色シルトの混合土が主体になっており、自然堆積の可能性が高い。[出土遺物] なし。[時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

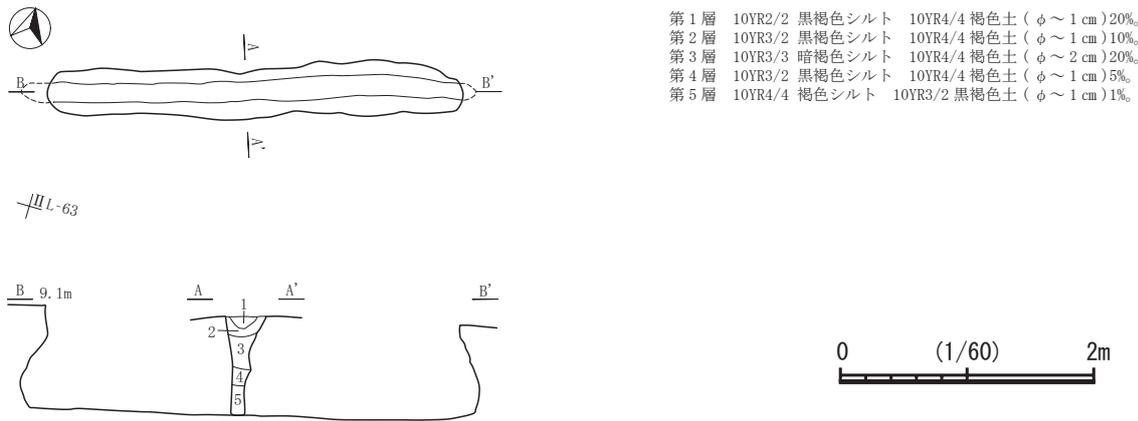


図15 B区第10号溝状土坑

B区11号溝状土坑 [BSV11] (図16、写真図版7)

[位置] II L-64 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は上端で長軸3 m 5 cm ×短軸47cm、下端で長軸2 m 96cm ×短軸22cm、深さ75cmである。長軸両端の壁は垂直に近い角度で立ち上がる。[堆積土] 4層に分層した。黒褐色・暗褐色・褐色シルトの混合土が主体になっており、自然堆積の可能性が高い。[出土遺物] なし。[時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

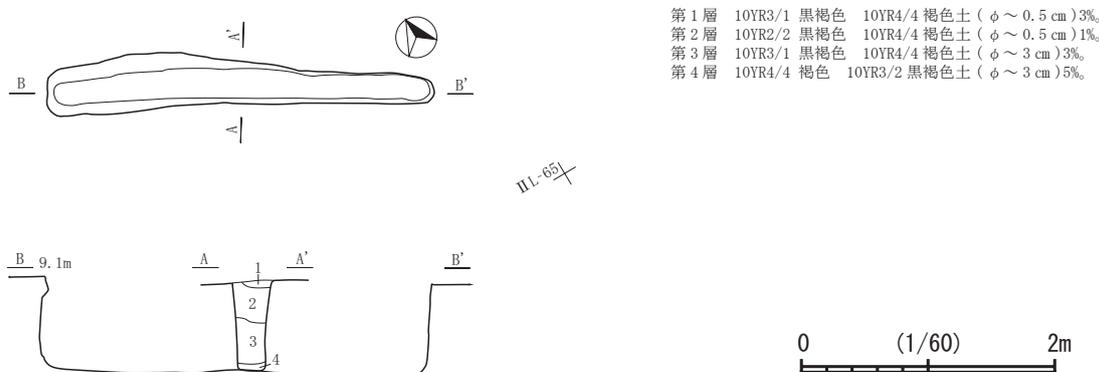


図16 B区第11号溝状土坑

B区第12号溝状土坑 [BSV-12] (図12、写真図版8)

[位置] II I-64 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3 m 58cm × 短軸45cm、底面で長軸3 m 92cm × 短軸45cm、深さ54cmである。長軸両端の壁は開口部から外側に広がる。底面両端付近は中央部より高くなる。[堆積土] 4層に分層した。黒褐色・暗褐色・褐色シルトの混合土が主体になっており、自然堆積の可能性が高い。[出土遺物] なし。[時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

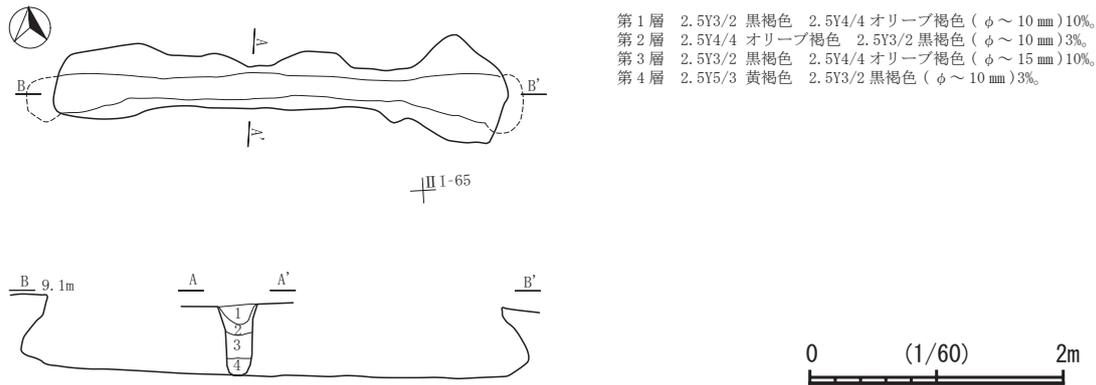


図17 B区第12号溝状土坑

B区第13号溝状土坑 [BSV-13] (図13、写真図版8)

[位置] II E-60 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3 m 57cm × 短軸69cm、底面で長軸3 m 66cm × 短軸12cm、深さ1 m 5 cmで、長軸両端の壁は開口部から外側に向けて広がり、底面に長軸最大長がある。[堆積土] 4層に分層した。第V層起源の黄褐色土が下位から中位にかけて堆積し、その間に暗褐色土が堆積する。第1層は黒褐色土とV層起源の黄褐色土が境界不明瞭な斑状に混合する。自然堆積の可能性が高い。[出土遺物] なし。[時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

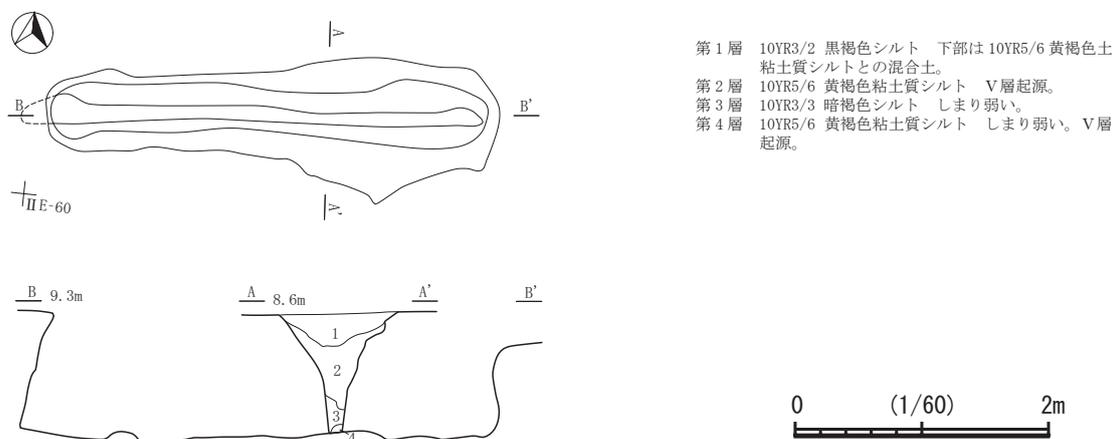


図18 B区第13号溝状土坑

B区第14号溝状土坑 [BSV-14] (図19、写真図版9)

[位置] II S-57・58 グリッドに位置する。[検出]第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 全体として溝状を呈するが、両端が円形に膨らむ鉄アレイ形の平面形である。規模は開口部で長軸3 m 57cm × 短軸69cm、底面で長軸3 m 66cm × 短軸12cm、深さ1 m 5 cmである。長軸両端の壁は開口部から外側に広がり、底面に長軸最大長がある。[堆積土] 4層に分層した。褐色のシルトが主体で、壁際には第V層起源の黄褐色粘土が三角堆積を示す。自然堆積の可能性が高い。[出土遺物] なし。[時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

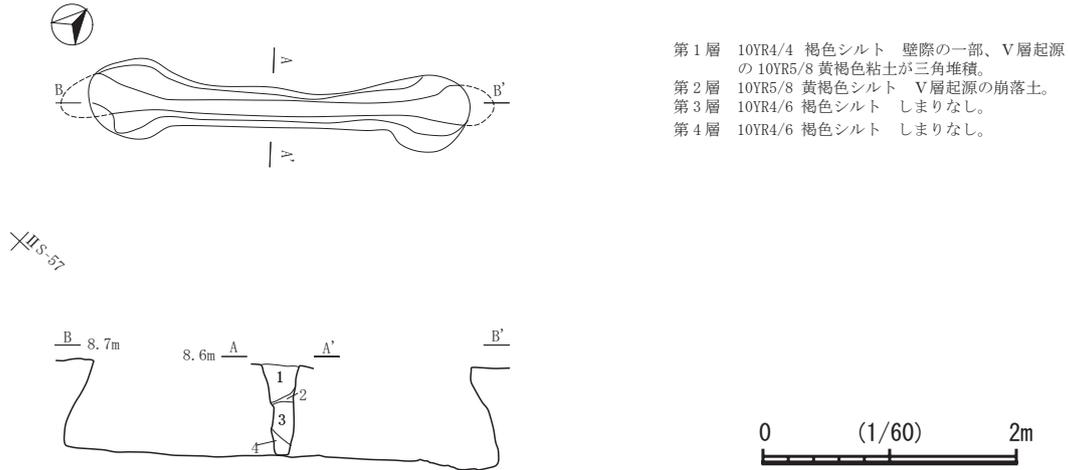


図19 B区第14号溝状土坑

B区第15号溝状土坑 [BSV-15] (図20、写真図版9)

[位置] II P-53 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3 m 69cm × 短軸58cm、底面で長軸3 m 37cm × 短軸12cm、深さ1 m 4 cmである。[堆積土] 4層に分層した。第1・2層では褐色・暗褐色のシルト中に第IV層・第V層起源の土壌が三角堆積を示し、第3層は第V層起源の崩落土と考えられる。自然堆積の可能性が高い。[出土遺物] なし。[時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

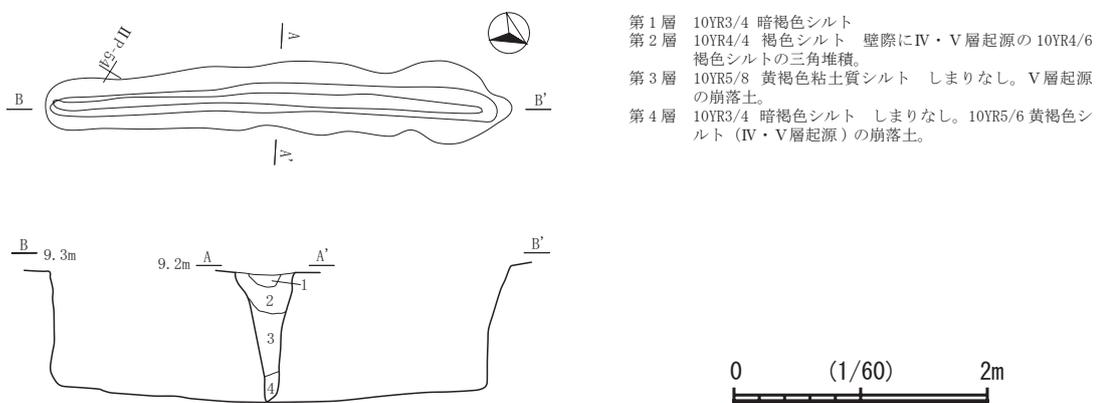


図20 B区第15号溝状土坑

B区第16号溝状土坑 [BSV-16] (図21、写真図版10)

[位置] II F・G-64 グリッドに位置する。[検出] 第IV層で黒色・暗褐色土の落ち込みを確認した。
 [規模・形状] 全体として溝状を呈する。規模は開口部で長軸3 m 34cm ×短軸21cm、底面で長軸3 m 35cm ×短軸17cm、深さ98cmである。長軸北側の壁は開口部から外側に傾斜して底面へと続く。南側の壁は凹凸があるが全体としては垂直に近い。長軸最大長は3 m 55cmである。[堆積土] 6層に分層した。黒褐色土・暗褐色土が主体で、一部に壁のIV～V層起源の崩落土とみられる土層が堆積する。自然堆積により埋没した可能性が高い。[出土遺物] なし。[時期] 本遺構に伴う遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

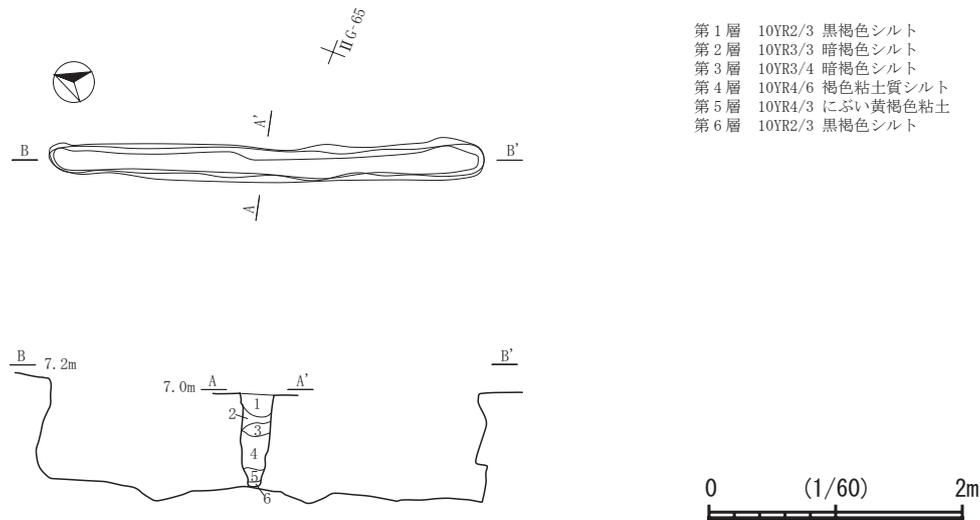


図21 B区第16号溝状土坑

第4節 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器 (図21-1～11、写真図版9)

1は口縁部に幅1cmほどの隆帯を貼り付け、隆帯を沈線で上下2分割する。下半にはLR縄文を横位回転施文する。隆帯の下限は沈線で区画している。

2は1と同一個体と思われる。

3は紐かけ様の突起を持つ壺形土器の一部と思われる。突起には上面側からの貫通孔がある。外面は楕円状または三角形を基調とした入り組み文の一部かと思われる文様が施されている。

4は口唇部直下に2条の平行沈線を施し、幅広い口縁部文様帯に3本1組の沈線で弧線を描いている。口唇部上面には沈線を施している。

5は平行な隆帯を施して方形の区画を作り出し、その間に円形を二分割したモチーフを配する。隆帯は幅1cmほどで、両側を幅1～1.5mmの沈線で縁取り、上面にはLR縄文を回転施文する。

6は幅3mmほどの平行沈線間にLR縄文を施す。

7は幅1.5mmの沈線で方形の区画を描き、沈線間に残された幅5～6mmの区画にLR縄文を回転施文する。

8は、摩滅しているが、沈線で入り組み様の文様を描くものと思われる。

- 9は、短軸絡条体1類を縦位回転施文する。胎土は黒色の光沢を持つ鈹物と石英が目立つ。
- 10は単軸絡条体5類を縦位回転施文する。
- 11は無節縄文(L)を縦位回転施文する。

(2) 石器 (図 21-11・12、写真図版9)

- 12は突起有茎の石鏃である。器体は厚みがある。
- 13は凹基無茎の石鏃である。器体の厚さは均等で、1mm前後である。

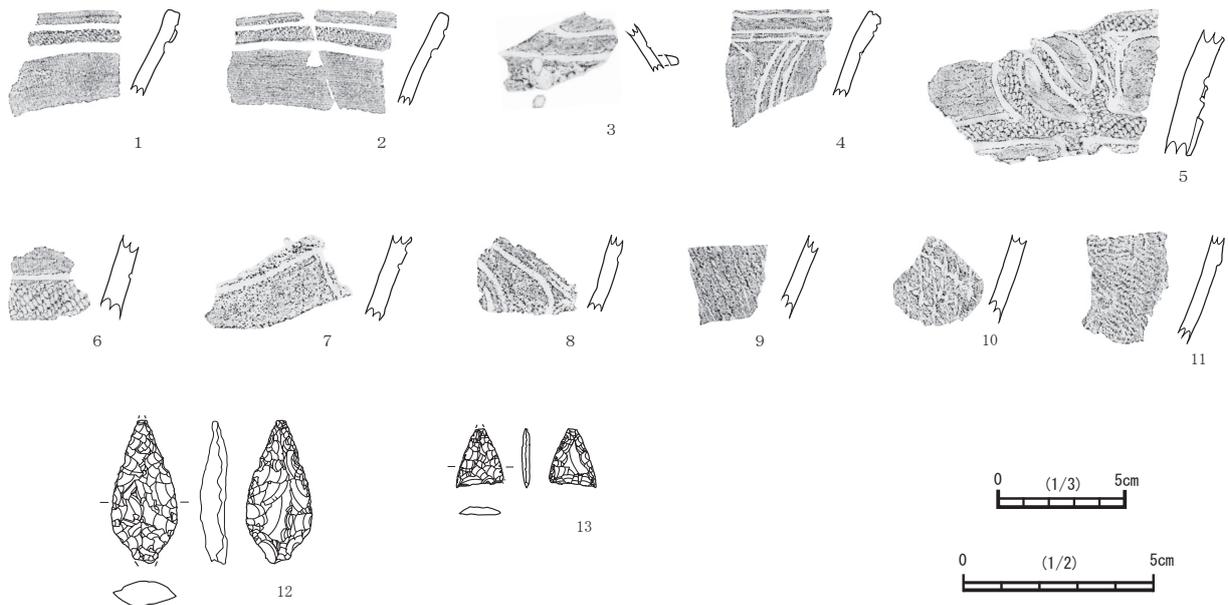


図 22 遺構外出土遺物

縄文土器観察表

図番号	出土位置	層位	取上番号	種別	器種	重さ (g)	外面文様等	内面調整等	備考
図 22 - 1	II J-52	I	P-X	縄文土器	-	15.5	隆帯上を沈線で上下に区画→下半に LR 横位回転→隆帯の下限に沈線。	工具ナデ	
図 22 - 2	II J-53	III	P-X	縄文土器	-	24.0	1 と同一個体	工具ナデ	
図 22 - 3	II T-51	カクラン	P-X	縄文土器	壺	9.7	上面側からの貫通孔がある紐かけ様の突起。楕円状または三角形を基調とした入り組み文の一部かと思われる文様。	工具ナデ	
図 22 - 4	II J-59	III	P-X	縄文土器	-	13.6	口唇部直下に 2 条の平行沈線。幅広い口縁部文様帯に 3 本 1 組の沈線による弧線モチーフ。口唇部上面沈線。	工具ナデ	
図 22 - 5	II K-51	I	P-X	縄文土器	-	68.8	隆帯上による方形区画と円形を二分したモチーフ。隆帯幅 1cm、両側を幅 1～1.5mm の沈線で縁取る。隆帯上 LR 回転施文。	工具ナデ	
図 22 - 6	II W-52	III	P-X	縄文土器	-	11.2	幅 3mm ほどの平行沈線間に LR 縄文	工具ナデ	
図 22 - 7	II I-53	I	P-X	縄文土器	-	18.8	1.5mm の沈線による方形区画→沈線間の幅 5～6mm の区画に LR 回転	工具ナデ	
図 22 - 8	II W-52	III	P-X	縄文土器	-	10.8	沈線による入り組み様のモチーフ	摩滅	
図 22 - 9	II J-53	III	P-X	縄文土器	-	8.9	単軸絡条体 1 類縦位回転。	工具ナデ	
図 22 - 10	II O-55	I	P-X	縄文土器	-	9.5	単軸絡条体 5 類縦位回転。	工具ナデ	
図 22 - 11	II W-40	I	P-X	縄文土器	-	10.3	無節縄文 (L) 縦位回転	工具ナデ	

石器観察表

図番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
図 22-12	II W-52	III	S-X	石鏃	1.9	1.8	0.7	4.4	珪質頁岩	
図 22-13	II J-60	III	S-X	石鏃	1.5	1.2	0.2	0.6	珪質頁岩	

第4章 総括

第1節 内田(2)遺跡の調査成果

内田(2)遺跡は、平成29年度及び令和元年度の2ヶ年の調査で、旧石器時代から縄文時代後期前葉に至る断続的な利用の痕跡を検出した。遺物出土量は縄文土器片 23,302g、石器・自然礫 20767.3g、土製品 13.5 gである。平成29年度の調査成果は『内田(2)遺跡』(青森県教育委員会 2019)として平成31年3月に刊行しているが、2ヶ年の調査の総括を行うため、概略について再掲し、令和元年度の成果と併せて記載する。

平成29年度

〔旧石器時代〕 ナイフ形石器1点(28.3g)が出土した。剥片やチップなど石器製作にかかわる遺物は出土せず、ナイフ形石器がこの地に遺棄されたのは偶発的な理由であった可能性が考えられる。

〔縄文時代前期・中期〕 土器片が数点出土したのみである。

〔縄文時代後期前葉〕 A区では平成29年度に調査を行った北端部から北東部斜面にかけて遺物が出土し、この時期の土坑3基も遺物分布域に重なって存在する。A区南半では遺物がほとんど出土しなかった。B区では、段丘面縁辺部及び縁辺部から谷地形に続く斜面で遺物が出土し、焼土遺構3基が検出された。また、時期不詳ながら、集石遺構1基(BSX-1)、自然礫集石(BSX-2)などもこの時期の可能性がある。

〔縄文時代〕 縄文時代に属する溝状土坑が29基検出された。

令和元年度

〔縄文時代〕 縄文時代に属する溝状土坑16基が検出された。令和元年度の調査区はほぼ全面が削平を受けていた。遺物は土器71片(514.3g)、石鏃2点(5.0g)が出土した。

旧石器時代のナイフ形石器は、基部に槌状剥離が施され、最終的に彫器として利用されている。ナイフ形石器としては東山型の範疇でとらえられる可能性がある。

縄文時代後期前葉の遺構はすべて平成29年度の調査で検出されたものである。小規模な集落であったと考えられるが詳細は後述する。

溝状土坑の用途は落とし穴とする意見が一般的である。本遺跡では二ヶ年にわたる調査で計45基検出された。下北地域では一遺跡から落とし穴がまとまって検出された例は東通村の前坂下(13)遺跡(青森県教育委員会 1983)の29基が最多で、ほかには若干の遺跡で検出例があるが、いずれも数基程度にとどまっていた。特に田名部平野では検出例がなく、本遺跡の事例は、この地域の縄文時代の落とし穴の実態を示す資料である。(中村・平山・佐藤)

第2節 縄文時代後期の集落について

本遺跡では縄文時代後期前葉の十腰内I式期の遺構が少数ながら検出された。調査区は大半が削平を受けていたため、どのような集落であったのか評価を行うためには若干の検討が必要である。グリッドごとの土器出土量(図23)を見ると、A区北端付近とB区に集中し、III C～III Mラインはほぼ遺物の空白地帯となっている。A区からB区北半にかけては削平を受けていたが、A区は大半でト

レンチャーによる耕作が行われており（写真図版1上）、遺物分布の多い北半ではトレンチャー堆積土からも細片が出土した。しかし、南半ではトレンチャー堆積土から遺物は全くといって良いほど出土しなかった。こうしたことから土器の出土状況は本来的な分布をある程度反映していると考えられる。隣接する畑地で遺物を採集できなかったこともその傍証となろう。

一方、遺構については、削平によって掘り込みが浅い竪穴建物跡などが失われた可能性もあるが、削平は耕作土直下に第IV層～第V層上部が露出する程度の深度で、土坑がすべて失われたとは考えにくい。従って、A区とB区の遺構群の間には遺構・遺物の空白域が存在した可能性が高く、土器型式の上からは同時であるが、同時に存在し一体となって機能した集落としてとらえることは難しい。それぞれ散発的に行われた小規模な居住活動の結果であると考えられる。

ここで、本遺跡の縄文時代後期前葉の集落を評価するため、縄文時代中期末葉から後期前葉の遺跡動態をみておきたい。

本遺跡付近では中期～後期の集落として複数の遺跡が知られている。内田(1)遺跡は本遺跡の北方約3km、標高25m前後の台地上に立地する。2群の環状掘立柱建物跡群が検出された縄文時代後期



図23 グリッドごとの土器出土重量（I～III層）

初頭から前葉の拠点的な集落である。

斗南丘(5)遺跡(青森県教育委員会 2015)は内田(1)遺跡の北方600～700m、M-1面上に立地する。周囲は削平されていたため集落規模は明らかではないが、竪穴建物跡2棟、土坑3基、焼土1基縄文時代前期末葉、中期末葉、後期初頭各時期の遺物が検出されており、断続的な利用のあり方がうかがえる。酪農(3)遺跡はM-1面を開析する谷を挟んで内田(1)遺跡の対岸に位置する同時期の、やはり拠点的な集落である。酪農(1)遺跡(青森県教育委員会 2016)は本遺跡の北側約4kmに位置する。M-1面を開析する谷地形に分断された尾根上の斜面、標高10m前後の複数地点から縄文時代早期中葉、前期末葉～中期後葉および後期前葉の各時期の遺構・遺物が検出されている。居住施設と考えられる竪穴建物跡様の施設が径20mの環状に配置されており、中期末葉～後期前葉にかけて断続的に利用されたものと考えられている。M-1面上に広がる遺跡と一体であった可能性も考えられるが、詳細は不明である。上道遺跡は土取によって消滅したと考えられるが、個人によって収集された遺物の内容(中村 2017・2018・2019)から推して拠点的な集落であると考えられる。最花遺跡(むつ市教育委員会 1978ほか)は、縄文時代前期から後期初頭の拠点的な集落と考えられる。また酪農(5)遺跡は部分的な調査であるため不明な点が多いが、配石が検出された(橘 1971)。縄文時代中期から後期前葉にかけて、田名部川左岸の段丘上で拠点的な集落が複数展開し、付近の標高の低い地域にも縄文人の居住活動が及んだ状況を見て取ることができる。本遺跡の集落も一連の遺跡動態の中で理解される散発的・小規模な活動の結果であると考えられる。

第3節 縄文時代の落とし穴について

本遺跡では、2カ年にわたる調査で合計45基の落とし穴が検出された。円形タイプのものはなく、すべて溝状タイプに分類されるものである。長軸長は開口部で1m79cm～4m95cm(平均3m31cm)、底面で1m98cm～5m19cm(平均3m41cm)、短軸長は開口部で21cm～1m3cm、底面で8cm～47cm深さは54cm～1m64cmである。両端が膨らむ繭状または鉄アレイ状の平面形を示す1基を除いてすべて細長い溝状を呈する。長軸上の両端の壁が袋状に広がるものが45基中32基を占める。

A区北半では段丘平坦面から沢筋の斜面に多くが長軸を等高線に並行して分布する(①)。ただし、斜面下方には分布しない。南半では沢筋が調査区東側へ続くためか、東側に偏って分布し西側が空白域となる(②)。調査区の東西を刻む谷は現在の農免道路付近を分水線とすると想定され、この付近に直交・平行両者が分布する(③)。BSV-10～12が湧水のある地点を取り囲むように分布する(④)。BSV-1・5～7・13、BSV-4などは等高線の張り出し部に位置し、長軸が等高線に直行する(⑤a・⑤b)。湧水池点に続く動線を意識したものと考えられる。全体として本遺跡の落とし穴の配置は沢筋での動物の行動を意識した配置となっていると考えられよう。

落とし穴が意図的に配列されているとみられる例はしばしばあるが、意図的な配列を可能ならしめる前提として、植生を意識しておく必要がある。森林環境では根を除去する工程が必須となり、不可能または極端に労力が増え現実的ではないと思われるからである。土壌学・地質学・古環境学などの分野では、黒ボク土は上方へむかって形成されること(山野井 1996)、黒ボク土を形成する主要因が微粒炭であること(進藤ほか 2003)、微粒炭の起源物質が草本植物であること(石塚・河室・南 1999)、黒ボク土が草原環境で形成されたこと(岡本 2005)が明らかにされるなど研究が進展して

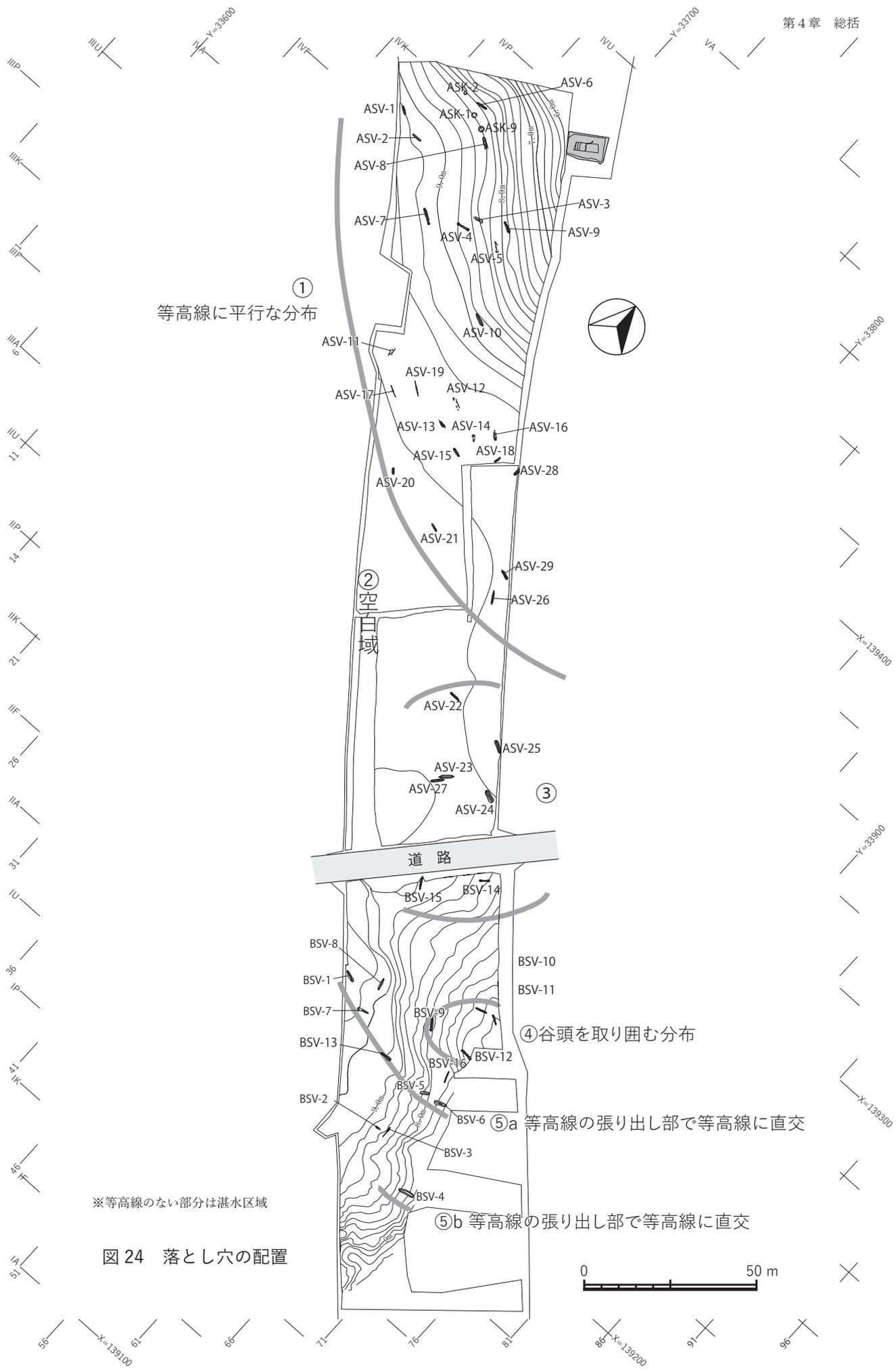


図 24 落とし穴の配置

いる。その結果、火入れを伴う人為的な植生管理が縄文時代に遡ると考えられるようになり (Hosono & Sase 1996、山野井 2015 など)、さらには旧石器時代に行われた可能性も指摘されている (細野・佐瀬 2015)。本遺跡が狩猟場として利用された時期の環境をにわかに明らかにすることはできないが、灌木が生えている程度の草原植生であれば落とし穴の配置は容易に決定できたと思われる。ただし、湿地と乾地など微細な環境による植生分布の変化もあり得るのでその点は注意が必要であろう。

遺物が出土した落とし穴は2基 (BSV- 6・9) ある。BSV-9は細片が堆積土上位から、BSV- 6は縄文時代後期の土器小片1点が底面附近から出土した。BSV-9は細片のみで、遺構に伴うものとはいいがたい。BSV- 6から出土した土器片は混入したものと考えた。発掘調査に携わっていれば地中1 m以上の深さでも植物の根が腐朽して生じた空隙を目にすることはしばしば経験するはずである。土器小片が植物根や小動物の作った穴に落ち込むことは比較的容易にあり得たと思われる。

一方で、BSV-4は付近に縄文時代後期前葉の遺物包含層が形成されているにもかかわらず、縄文時代後期前葉の土器は堆積土から出土しなかった。したがってBSV-4は縄文時代後期前葉には大半が埋積されており、それ以前のものと考えられた。他の落とし穴については時期差を持つ可能性もあるが、主体となるのは後期前葉以前であろう。

本県南部地方の中振浮石が分布する地域では、溝状の落とし穴のほとんどは中振軽石降下 (縄文時代前期後半、円筒下層 a 式直前の 5,900 cal B.P. (後藤・辻 2000、辻・中村 2001)) 後のものであると判断される。従って本遺跡で検出された溝状の落とし穴は縄文時代前期後半から後期初頭までの間のものと考えられる。

A区・B区とも落とし穴に近接して小規模な集落の痕跡が残されている。A区ではフラスコ状土坑3基、B区では焼土が3基形成され、両者とも付近から土器・石器が出土している。焼土はいずれも廃棄されたものと判断したが、廃棄される前の焼土自体は短時間で形成されるものでもない。フラスコ状土坑、焼土いずれも一定期間の生活を示す痕跡と考えるのが妥当であろう。仮に一度の滞在が短期間のものだったとしても、繰り返し利用されたと考えられ、土地の占有期間としては相応の期間を想定する必要がある。

現に利用中の落とし穴から数 m ~ 20 m 程度の場所で縄文人が一定の期間生活を営むとは考えにくく、集落と落とし穴は別の時期のものと考えるのが妥当であろう。BSV-4の状況とも整合的である。

集落と落とし穴が別の時期のものだとすれば、落とし穴を構築し利用した縄文人の居住地が問題となる。遺跡の直近で、前期後半から後期初頭までの間で拠点的な集落と考えられるのは最花遺跡や上道遺跡、内田(1)遺跡である。本遺跡より南で前期後半から後期初頭の拠点的と目される遺跡は知られていない。現状の資料による限り、本遺跡の落とし穴を営んだ縄文人の居住地は最花遺跡や上道遺跡、内田(1)遺跡が立地する田名部川左岸 (南東側) のM-1面が想定される。

本遺跡が後期初頭またはそれ以前には狩猟域として、後期前葉には集落として利用されたことは、集団領域内の空間利用が変化したことを示すもので、その背景として田名部平野の環境変化が考えられる。本遺跡の調査結果は、この地域の縄文時代の歴史を復元する上で貴重な情報を提供したといえる。

(中村)

参考文献

- 青森県教育委員会 2015 『斗南岡（5）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第555集
 2016 『酪農（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第568集
 2018 『内田（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第592集
 2019 『内田（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第602集
- 安藤弘道・安達香織 2009 「1. 青森県最花貝塚遺跡 A 地点出土土器の分析」『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究』（課題番号：18520589）平成18～20年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果
 慶応大学義塾大学文学部民族考古学研究室
- 石塚成宏・河室公康・南浩史 1999 「黒色土および褐色森林土腐植の炭素安定同位体分析による給源植物の推定—八甲田山南山麓における事例—」『第四紀研究』38巻2号 pp.85-92
- 江坂輝彌 1955 「青森県女館遺跡発掘調査報告」『石器時代』2号
- 岡本透 2005 「土壌と土地利用—黒色土の由来—」『森の生態系史—北上山地の景観とその成り立ち—』古今書院 pp.73-86
- 岡本透 2009 「森林土壌に残された火の痕跡」『森林科学』55
- 小椋純一 2009 「火からみた江戸～明治の森林植生」『森林科学』55 pp.5-9
- 金子浩昌・牛沢百合子・橘善光・奈良正義 1978 『むつ市文化財調査報告第4集』むつ市教育委員会 pp.1-52
- 金子浩昌・橘善光・奈良正義 1983 「最花貝塚第3次調査報告」『むつ市文化財調査報告第9集』むつ市教育委員会 pp.36-168
- 後藤加奈子・辻誠一郎 2000 「青森平野南部，青森市大矢沢遺跡における縄文時代前期以降の植生史」『植生史研究』第9巻第1号 pp.43-53
- 進藤晴夫・牛島夏子・本名俊正・山本定博・本間洋美 2003 「黒ボク土における植物炭化物の分布と腐植組成あるいは非晶質 Al 成分との関係」『日本土壌肥料学雑誌』74 pp.485-492
- 橘善光 1971 「田名部酪農5遺跡配石遺構調査概報」『北奥古代文化』第3号 北奥古代文化研究会
- 橘善光 1986 『最花貝塚発第4次調査報告』むつ市教育委員会
- 橘善光編 1981 『最花貝塚北地区遺跡』第二下北送電線鉄塔に伴う緊急発掘調査報告 最花貝塚遺跡緊急発掘調査団・むつ市教育委員会
- 橘善光・奈良正義 1977 「むつ市金谷貝塚調査報告」『昭和51年度むつ市文化財調査報告』第3集
- 橘善光・奈良正義 1980 「最花貝塚第2次調査報告」『むつ市文化財調査報告第6集』むつ市教育委員会 pp.1-72
- 橘善光・奈良正義 1981 「上道遺跡発掘調査報告」『むつ市文化財調査報告第7集』むつ市教育委員会 pp.1-53
- 橘善光・奈良正義・山口義伸 1975 「田名部川流域における低位沖積層の発達—田名部川流域の自然—」『むつ市文化財調査報告』第2集
- 橘善光・奈良正義 1984 「最花南遺跡第2次調査報告」『むつ市文化財調査報告第10集』むつ市教育委員会 pp.3-49
- 橘善光・奈良正義・星和夫 1985 「最花南遺跡第一次発掘調査報告書」『むつ市文化財調査報告第11集』むつ市教育委員会 pp.3-87
- 辻誠一郎・中村俊夫 2001 「縄文時代の高精度編年；三内丸山遺跡の年代測定」『第四紀研究』 pp.1-12
- 中村哲也 2018 「山田コレクションについて（1）」『むつ市文化財調査報告』第47集 むつ市教育委員会 pp.3-22
 2019 「山田コレクションについて（2）」『むつ市文化財調査報告』第48集 むつ市教育委員会 pp.3-18
 2020 「山田コレクションについて（3）」『むつ市文化財調査報告』第49集 むつ市教育委員会 pp.3-16
- 細野衛・佐瀬隆 2015 「黒ボク土層生成史：人為的生態系からの試論」『第四紀研究』第54巻5号 pp.323-339
- 松島義章・奈良正義 1988 「下北半島田名部平野の海成沖積層から産出した貝殻の¹⁴C年代とそれに関する問題」神奈川県立博物館研究報告17 神奈川県立博物館 pp.57-72
- 松本秀明 1984 「海岸地形にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動」『地理学評論』第57巻第10号 日本地理学会 pp.720-738
- 山野井徹 1996 「黒土の成因に関する地質学的検討」『地質学雑誌』102巻6号 pp.526-544
 2015 『日本の土—地質学が明かす黒土と縄文文化』築地書館
- Takashi Sase and Mamoru Hosono, Vegetation histories of Holocene volcanic ash soils in Japan and New Zealand—Relationship between genesis of melanic volcanic ash soils and human impact—, Earth Science (Chikyū Kagaku) vol.50, 466-482, 1996



A区空中写真（南から）



A区深掘（西から）

写真図版1



ASV-23・27 完掘状況 (南西から)



ASV-22 土層堆積状況 (西から)



ASV-22 完掘状況 (西から)

写真図版 2



ASV-23 土層堆積状況（北東から）



ASV-23 完掘状況（南西から）



ASV-24 土層堆積状況（南東から）



ASV-24 完掘状況（南東から）

写真図版 3



ASV-25 土層堆積状況（北西から）



ASV-25 完掘状況（北西から）

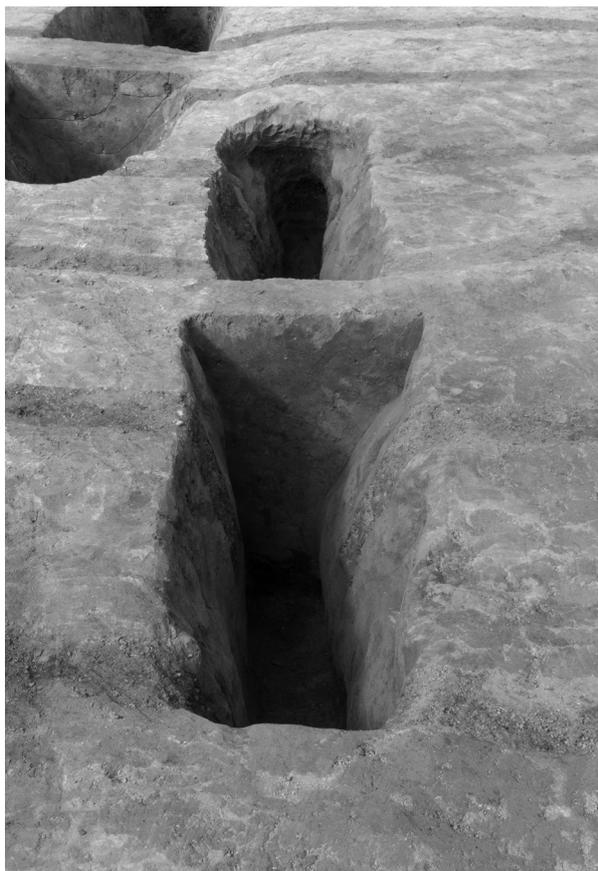


ASV-26 土層堆積状況（南東から）



ASV-26 完掘状況（南東から）

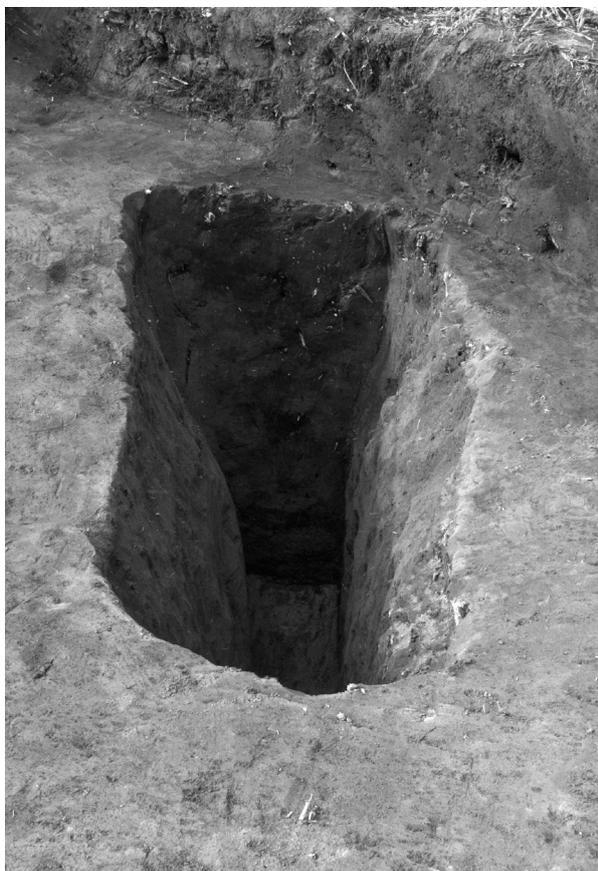
写真図版 4



ASV-27 土層堆積状況（南西から）



ASV-27 完掘状況（南西から）



ASV-28 土層堆積状況（南から）



ASV-28 完掘状況（南から）

写真図版 5



ASV-29 土層堆積状況 (北西から)



ASV-29 完掘状況 (北西から)



BSV-09 土層堆積状況 (南東から)



BSV-09 完掘状況 (南東から)



BSV-10 土層堆積状況（西から）



BSV-10 完掘状況（西から）



BSV-11 土層堆積状況（南東から）

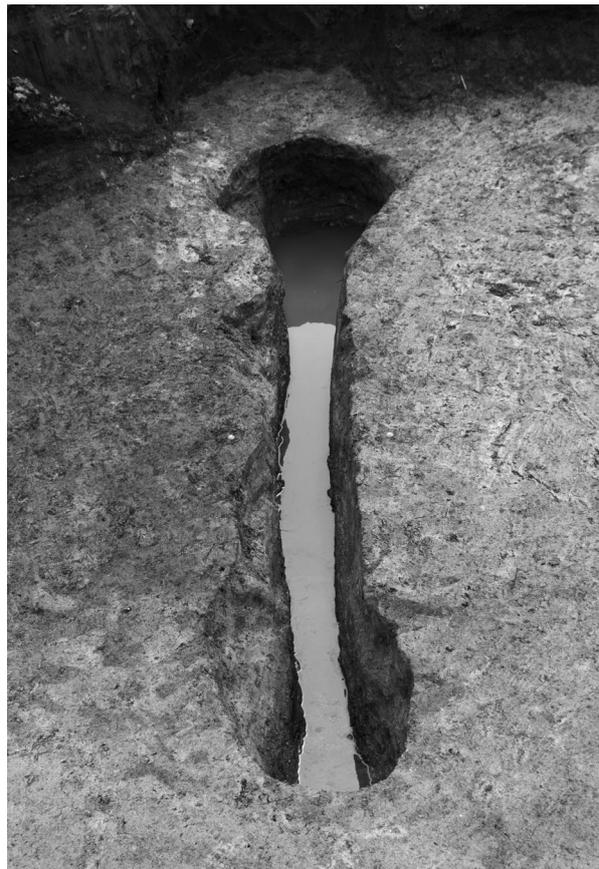


BSV-11 完掘状況（南東から）

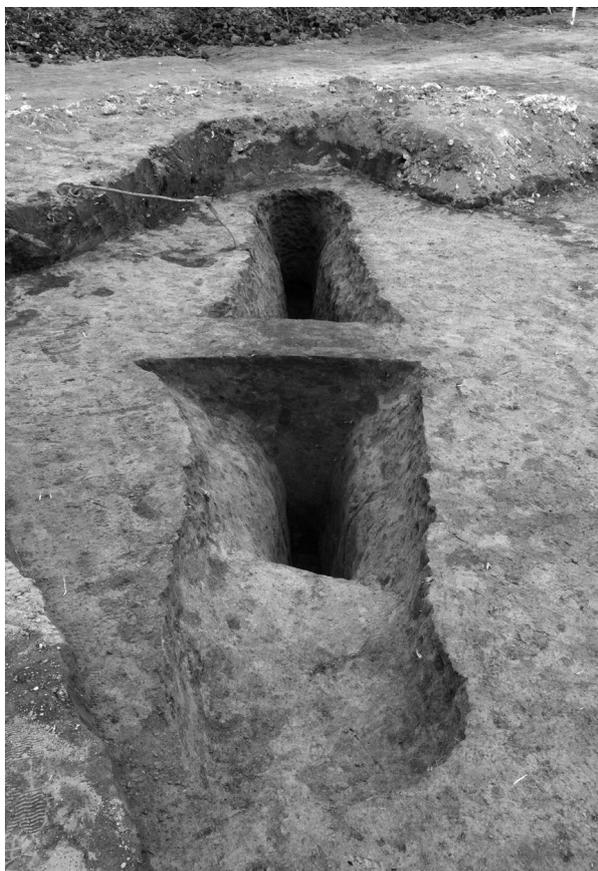
写真図版 7



BSV-12 土層堆積状況 (西から)



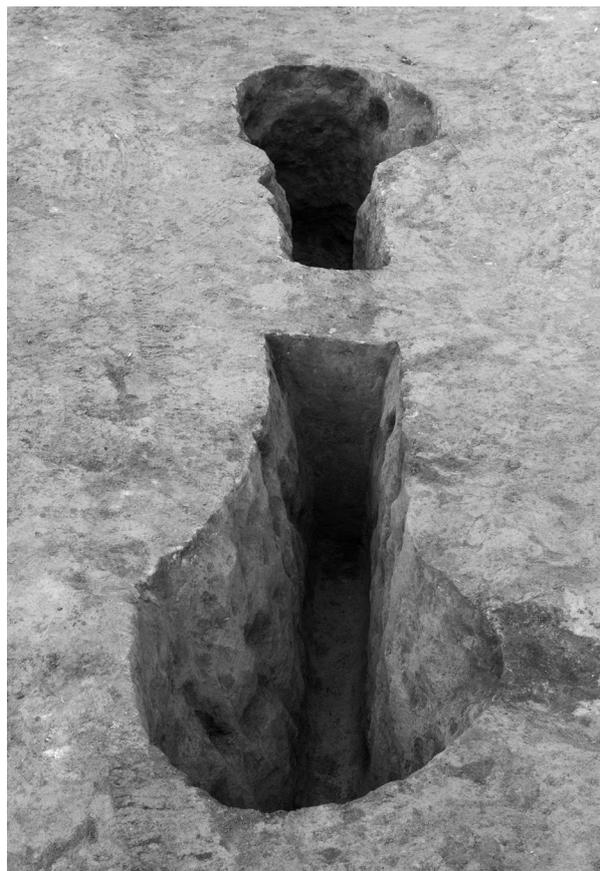
BSV-12 完掘状況 (西から)



BSV-13 土層堆積状況 (東から)



BSV-13 完掘状況 (西から)



BSV-14 土層堆積状況（南西から）



BSV-14 完掘状況（南西から）



BSV-15 土層堆積状況（南東から）



BSV-15 完掘状況（南東から）

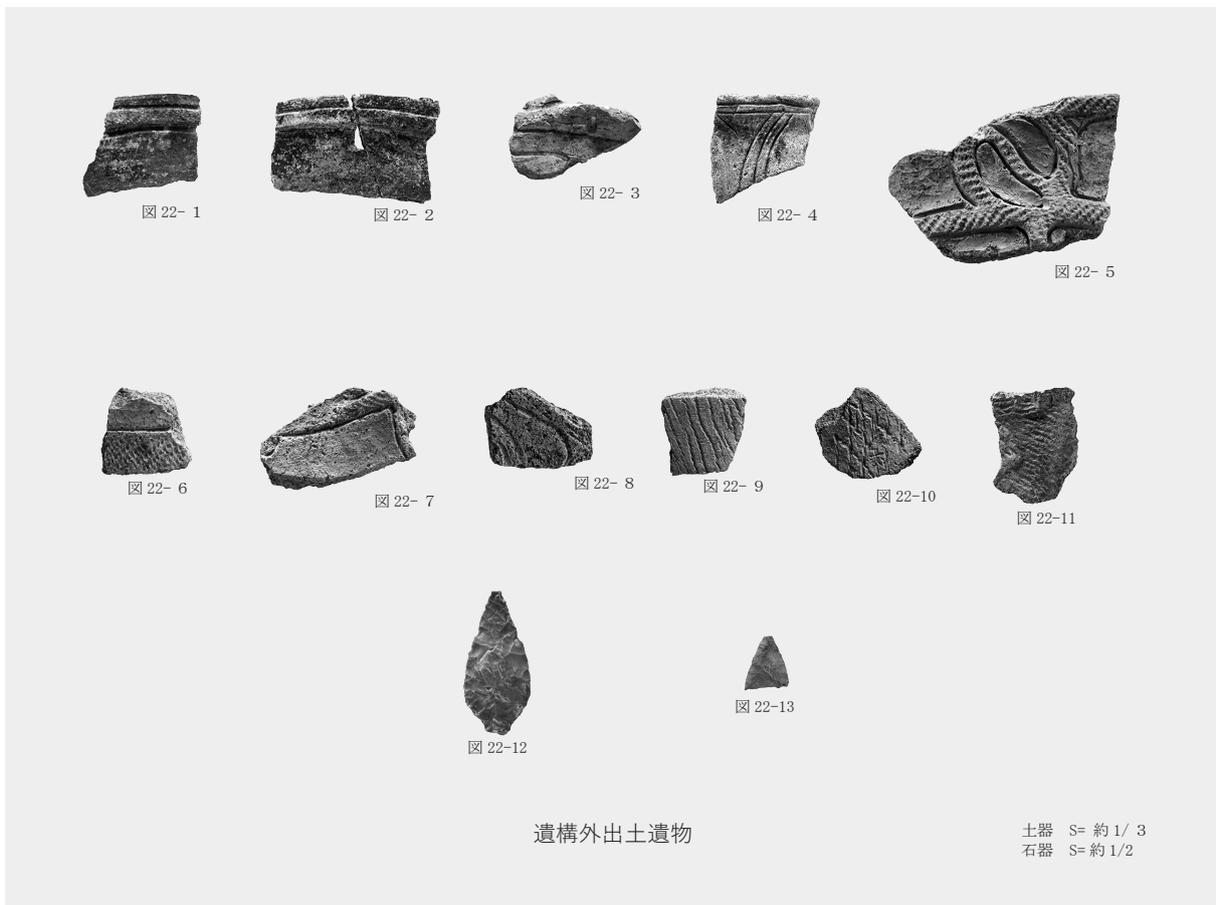
写真図版 9



BSV-16 土層堆積状況 南から



BSV-16 完掘状況 南から



写真図版 10

報告書抄録

ふりがな	うちだかっこにいせき に							
書名	内田（2）遺跡Ⅱ							
副書名	国道 279 号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 619 集							
編著者名	中村哲也 平山明寿 佐藤智生							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒 038-0042 青森市新城字天田内 152-15 TEL. 017-788-5701 FAX. 017-788-5702							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2021 年 3 月 10 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系（JGD2011）		調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡 番号	北緯	東経			
うちだかっこにいせき 内田（2）遺跡	あおもりけん 青森県むつ市 たなぶあざうちだ 田名部字内田地内	02208	208185	41° 15' 14"	141° 10' 11"	20190424 } 20190628	6,000	記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
内田（2）遺跡	狩猟場	縄文時代前期後 半～後期初頭		溝状土坑 16				
	散布地	縄文時代後期前 葉			十腰内I式土器			
要 約	<p>令和元年度の調査で縄文時代に属する落とし穴（溝状土坑）が 16 基検出された。平成 29 年度に調査した後期の集落との関係から前期後半～後期初頭の間構築されたものと考えられる。落とし穴は平成 29 年度の調査と併せて二ヶ年にわたる調査で計 45 基検出された。一遺跡から落とし穴がまとまって検出された遺跡は田名部平野では初見で、この地域の縄文時代の落とし穴の実態を示す資料である。</p> <p>本遺跡の利用形態が狩猟場から小規模な集落へと時間的に変化したことは、集団領域内の空間利用のあり方が変化したことを意味し、その背景には田名部平野の環境変化があると推察される。</p>							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第 619 集

内田（２）遺跡Ⅱ

—国道 279 号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2021 年 3 月 10 日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内 152-15

TEL.017-788-5701 FAX.017-788-5702

印刷 株式会社 ヒロタ

〒030-0142 青森市大字野木字野尻 37-691

TEL.017-729-8321 FAX.017-773-8325
